

---

# 仮面ライダースサノオ KAMEN RIDERS SAGA

パニック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー スサノオ K A M E N R I D E R S S A G A

### 【Nコード】

N 6 8 0 3 U

### 【作者名】

パニツク

### 【あらすじ】

9 / 1 3 タイトル変更しました。

今、仮面ライダー達の新たな戦いが始まろうとしている。そして、その物語の中核にいるのは、誰も知らない仮面ライダー……。昭和の仮面ライダーの魂を引き継ぎ、平成の仮面ライダーを導く者。

その名は仮面ライダー スサノオ！！

この作品は以前、作者が別名で掲載していたものを新しく書き直したものです。ちなみにこの作品は“もし全ての仮面ライダーが同じ世界に存在していたら”とゆう世界観で展開していきます。

## ブログ（前書き）

できるだけ更新するよう頑張ります。

7/11、若干修正しました。

## プロローグ

この世界はかつて、様々な悪しき者達に狙われた。

しかし、人々の命が、自由が狙われたとき、彼らは必ずやって来た。

風のように現れ、嵐のように戦って、そしてまた風のように去って行く。

その名は仮面ライダー！！

そして今……

誰も知らない仮面ライダーの物語が始まろうとしていた。

夜の暗闇の中、人気の無いビルの屋上で、様々な動植物の特徴を持つ複数の怪人と黒い戦士が戦っていた。

バザー

「ギベー！！」

かつて仮面ライダークウガと闘った殺人集団グロンギの1人、ズ・バザー・バは勢い良く飛びかかる。

？

「螺旋拳<sup>らせんけん</sup>！」

黒い戦士が放った回転を加えたパンチがバZZーの身体を貫く。

バZZー

「ダ…ダババ！？」

断末魔の唸りを挙げ、バZZーは爆発した。

？

（……何故コイツ等がここにいる？）

仮面の戦士は内心軽く戸惑いながらも、決して隙は見せず、目の前の異形達を蹴散らしていく。

スコーピオンイマジン

「てめえ！調子にのってんじゃねえぞ！」

ジュラフォルフェノク

「雑魚を倒した程度で調子に乗るなよ！」

現在の時間を自分達の存在する未来に繋げようとした未来からの侵略者イマジンの1人、スコーピオンイマジンと、人間から進化した存在、オルフェノクの1人、ジュラフォルフェノクは左右から黒い戦士を挟み討ちにしようとする。

？

「顕現！草薙乃太刀、月光！日輪！」

黒い戦士が叫ぶと、両手に鐔の無い白と黒の日本刀が出現した。

？

「はあっ！！」

スコピオンイマジンとジュラフォルフェノクが反応するより早く、刃は振り下ろされ2体の怪人は縦に一刀両断され爆発した。

？

（グロンギにオルフェノクにイマジン、何故コイツ等がまとまって行動している？）

マンティスワーム

「おのれ〜！！」

最後に残った1体、地球外から来た異種生命体・ワームの1人、マンティスワームはワーム成虫体固有の能力、超高速移動・クロックアップは発動させた。

？

（……ワームもか…）

周囲の光景が停止し、黒い戦士の動きが止まる。

マンティスワームは手に持った刃で黒い戦士の首を両断しようとする。

マンティスワーム

「これで終わりだ!!……なに!!??」

しかし、あと数ミリの距離まで迫ったはずの刃は空を切る。

マンティスワーム

「ばっ……バカな!?!どこにいった?」

目の前に居たはずの標的が、クロックアップをしている自分が感知できないほど早く動いたことにマンティスワームはかなり同様した。

?

「遅い」

声のした方向、自分の頭上を見上げたマンティスワームは絶句した。

黒い戦士が既に自分に向かって飛び蹴りを放つ体制に入っていたのだ。

?

「天脚!?!」

マンティスワームは断末魔の叫びすら挙げる間も無く、黒い戦士の飛び蹴りを受け爆発した。

?



「ふう」

全ての怪人を倒した黒い戦士は、若い男の姿になる。

スラリと伸びた長身に後頭部で束ねた長く真っ白な髪、整った顔立ちの左目部分には黒い眼帯をしている。

？

「……いつまで見ているつもりだ？」

青年が後ろを振り返ると、何もなかった場所に銀色のオーロラが現れ、フェルト帽を被り、長いコートを着た男がオーロラから出て来た。

？

「……さすがだね。仮面ライダーサノオ……いや神夜倭君」

かみやまと  
神夜倭と呼ばれた青年は鋭い眼差しで男を睨む。

倭

「……何をしにきた、鳴滝？」

“ 鳴滝 ”

かつて、世界の破壊者と呼ばれたライダー、仮面ライダーディケイド・門矢士の旅の先々に現れ、様々な妨害を行った謎の男である。

倭

「……俺にコイツ等を差し向けたのはお前か？」

鳴滝

「いや、私ではない。だが、そんなことはどうでもよいことだ」

倭

「だろうな、お前の目的は……」

鳴滝

「君ほど聡明な人間ならわかるだろう？ 私のやるべきことは常に一つだよ」

鳴滝は不気味な笑みを浮かべる。

倭

「断る」

倭は一言だけ呟くと、鳴滝に背を向けて歩き出す。

鳴滝

「何故だ？ 君なら確実にディケイドを倒せる！ そう、かつてディケイドを倒した君ならば！」

鳴滝の言葉に倭は立ち止まり、先ほどよりも更に鋭い眼差しで鳴滝を睨む。

倭

「…鳴滝、2つだけ言っておく。土はもう破壊者じゃない。そしてもう1つ、世界に必要なのはお前の方だ」

言い終わると、倭は振り返らずにその場を去った。

残された鳴滝は拳を強く握りしめ、表情は怒りに満ちていた。

## プロローグ（後書き）

ここからしばらく、主人公の出番はありません。

## オリジナルキャラクター紹介 11/20更新（前書き）

今更ですがキャラクター紹介です。紹介と言うより設定といった感じです。

## オリジナルキャラクター紹介 11/20更新

かみやまと  
神夜倭

性別：男

年齢：24歳

身長：185cm

髪型：腰まで届く長髪

髪の色：白

身体的特徴：左目の眼帯

職業

本職：喫茶店アミーゴのマスター 兼 立花モーターショップ店長

副業1：会社経営

副業2：科学者

イメージキャラクター：『鉄のラインバレル』の森次玲二＋『仮面ライダー剣』の嶋昇

概要

仮面ライダースサノオに変身する青年。性格は冷静沈着かつ穏やかで人当たりも良く、情に厚い。

容姿・性格・スポーツ・学力等、全てにおいて完璧だが、カブトの天道とは違いそれを誇ったりすることは無い。

身体能力は非常に高く、並みの怪人レベルなら変身しなくても圧倒するほど

機械に関する技術・知識も非常に高く、過去の闘いで破壊されたライダーのアイテムの修理も行っている。

昭和・平成を問わず、ほぼ全ての仮面ライダーに関する知識を持ち、昭和ライダーとは関わりがあり、1号「J」のことを先輩と呼ぶ。

過去の経歴は不明で、前述の知識やスサノオへの変身能力をどうやって手に入れたのかは全て謎に包まれている。

世界的な資産家でもあり、様々な企業に投資しており他国の政府にも顔が効く。

仮面ライダースサノオ

複眼色：右・赤 左・黒

体色：黒・金

神夜倭が変身した仮面ライダー。

通常時でも、クウガのアルティメットフォームに匹敵する程の圧倒的な身体的能力を誇り、倭自身の高い力量もあって非常に高い戦闘能力を持つ。

余りにも強すぎる力を持つため、普段は30～40%程度まで力を抑えている（それでもかなり強い）。

様々な“怪人”の能力を使用することができらしいが詳細は不明。

### 《武器》

剣：草薙之太刀  
クサナギノタチ

白と黒の鍔のない日本刀。

黒い方が月光、白い方が日輪と区別される。

### 《マシン》

マ斯拉オウ

機体色：黒・金のライン

最高時速：1000km

スサノオの専用バイク（イメージはドラゴンナイトでレンが乗っていたバイク）

見た目は普通のバイクと変わらないが、普通の人間では全く乗りこなせない。

スサノオの脳波によって無人での走行も可能。



## オリジナルキャラクター紹介 11/20更新（後書き）

オリジナルのキャラ・ライダー・怪人は何人か出す予定ですが、アイデアは随時募集しています。

全て採用・設定を反映はできませんが、ご了承ください。

## 第1話 闇（前書き）

短いです

## 第1話 闇

この世のどこか……深く、暗い闇の中で蠢く複数の人影があった。

？

「ボソダダバ」

最初に口を開いたのは、かつて太古より蘇った殺人集団グロンギを率い、殺人ゲーム・ゲゲルを取り仕切っていたバラのタトウの女、ラ・バルバ・デはグロンギ語で静かに呟いた。

？

「……………」

羽織りのようなモノを纏った赤い蜥蜴の怪人、人類の創造主・闇の力の遣い、火のエルは俯いたまま反応しない。

？

「…………いや、まだヤツが来ていない」

バルバの言葉に反応したのは、かつて鏡の中の世界・ミラーワールドで自らの願いを叶えるために戦った13人の仮面ライダーの1人にして、生き残った最後のライダーに立ちふさがる13人目のライダー、オーデインだった。

？

「大切な会合に遅れるとは…下の中ですね」

呆れたように呟いたのは世界的な大企業・スマートブレインの元社

長、ローズオルフェノクこと村上侠児。

？

「まあ、仕方あるまい。彼には重要な仕事を任せているのだからな」

続いて口を開いたのは元人類基盤史研究所・BOARDの理事長にして、現代に再開された不死生命体・アンデッドの地球を支配するための種を決める闘い・バトルファイトを操作しようとした男、天王寺博史。

？

「重要なのは確かだけどねえ。僕たちにも色々やることもあるのも確かだよ」

かつて、不気味な洋館に住み、日本に古来より存在する妖怪・魔化魍を生み出していた和服姿の若い男女の内、男の方が小さな声で呟いた。

？

「不愉快だ」

苛立ちながら呟いたのは、かつて異星生命体・ワームに対抗する組織、ZECTの首領補佐を務ながらも、最終的には人類を裏切った男、三島正人。

？

「どいつもこいつもガタガタうるせえよ！つたく、この俺様を待た

せるとはいい度胸だ！」

粗雑な態度で怒鳴ったのは、かつて敗北しない最強の悪の組織（仮）を作ろうとしたはぐれイマジン、ネガタロス。

？

「フン、ようやく来たようだ」

とある方向を睨んだ男は、この世に存在する13の魔族の1つ、ファンガイア族のかつて頂点に君臨していた先代のキング。

キングが言い終わると、全身が黒で覆われた異形の姿の人物が立っていた。

その異形の姿はかつて世界の破壊者と呼ばれた仮面ライダーディケイドの激情態に酷似していた。

ディケイドとの違いは、禍々しく歪んだ複眼とマゼンタの部分が血のように紅く輝き、それ以外の身体の全てが漆黒に染まっていることだった。

？

「首尾は如何ですか？」

全く表情を動かさずに淡々と尋ねたのは、かつて財団Xのエージェントを務め風都で暗躍した男、加頭順

？

「大量だ。大方のカードは揃った」

ディケイドに酷似した戦士は、淡々と告げる。

その手には、様々な種類の怪人が描かれたカードが握られていた。

声から察するに黒い異形は若い男であるようだ。

バラバ

「ボセゼ、ジュンツザドボダダ」

一言だけ呟くと、バラバの姿は消えた。

火のエル

「人が人を殺してはならない」

バラバに続くように火のエルも姿を消した。

村上

「では、我々のプロジェクトを始めましょう」

消えた者には大して気にも止めず、村上は残ったメンバーに宣言した。

天王寺

「では始めよう。我等の邪魔者、仮面ライダーの抹殺を」

？

「…一つ、気になることがある」

天王寺

「なんだね？デビル」

黒い異形、デビルと呼ばれた戦士の発言に、その場にいた全員が振り返った。

デビル

「ライダー達の監視の任に着いていた者達が次々にやられている」

「バリントッ！」

加頭が持っていた万年筆を落とし、その場に落下音が響いた。

加頭

「監視の者達は常に3〜4体の複数で当たっていたはずですが、そして些細な事柄でも、直ぐに報告するように伝えておいたはずですが？」

洋館の女

「それって……、報告する間も無くやられたってこと？」

デビル

「おそらくな。そして…やられた怪人の中にはワームもいた。それが報告する間も無くやられたということは……」

三島

「クロックアップか？」

村上

「……文字通り我々に敵対する正体不明の敵がいると見た方がいいでしょうね」

洋館の男

「未知の敵…ね、なかなか面白そうだねえ」

洋館の男は不気味に、しかし面白そうに笑った。

キング

「フン、くだらぬ」

キングは一言だけ呟いて姿を消した。

天王寺

「…どうやら、やることが増えたようだな」

村上

「ええ、謎の敵の調査も平行して行いましょう」

洋館の男

「じゃあ、今日はもう解散でいいね。何人かはもう帰っちゃったしね」

洋館の男の言葉を皮きりに、その場にいた者達は次々に消えていった。





## 第1話 闇（後書き）

今回登場したオリジナルキャラのデビルは、ある特撮作品のキャラクターがモデルです。

因みに名前の由来は、ディケイドに悪魔<sup>デビル</sup>及び、悪<sup>イビル</sup>を掛け合わせたものです。

## 第2話 再来 7/17加筆（前書き）

今回から、平成ライダーの主演達の話がしばらく続きます。

## 第2話 再来 7/17加筆

成田空港・国際ターミナル。

今、ここに一人の青年が降りたつた。

雄介

「日本かあゝ、随分久しぶりだなあ」

この青年の名は五代雄介。

かつて超古代から蘇った殺人集団グロンギこと、未確認生命体との戦いで、未確認生命体第4号・仮面ライダークウガとして人々の笑顔を守るために戦った優しい青年である。

未確認生命体第0号、ン・ダグバ・ゼバとの戦いの後、再び世界を旅し長らく日本には帰っていなかったが今回、南米を旅していたとき、不吉な予感を感じ、急遽帰国したのだ。

雄介

「さてと、まずは桜子さんのところに行こうかな」

雄介は友人、沢渡桜子の下に行こうと、愛車・ビートチェイサー2000に跨りその場を発しようとするが…

？

「リッベガゾ、リント！」

雄介

「…！？お…お前は！？」

雄介は目の前の光景が信じられなかった。

目の前にはかつて自分がクウガとしての始めて戦いの時に倒した未確認生命体がいたのだ。

雄介

「未確認！しかも第1号！？なんで！？」

突然の出来事に雄介が動揺した瞬間、未確認生命体第1号、蜘蛛種怪人ズ・グモン・バは雄介に飛びかかってきた。

雄介はとっさに身構えるが反応が遅れたため、吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

雄介

「ガハッ！？くっ！！」

ダメージを受けつつも何とか立ち上がった雄介は自らの腹部に目をやる。

かつてのダグバとの戦いでアマダムを破壊され、今の雄介はクウガに変身する力を失っていたのだ。

この時、不覚にも雄介は、グモンから視線を外してしまった。

その隙を付いて接近したグモンは、雄介の首を掴み持ち上げる。

雄介

「ぐっ……はあはあはあ」

雄介は苦しみながらも何とか抵抗するが、所詮微々たる人間の力では悪あがき程度にしかない。

グムン

「ギベ！リント！」

グムンは更に雄介を持ち上げる手に力を入れる。

雄介

「ぐっ……あ……」

雄介の意識が霞み、視界が暗くなる。

雄介

「あれ？ここは？」

次の瞬間、雄介の目に映ったのは周りに何も無い白い空間だった。

雄介

「あ……あれ？どこだろう、ここ？俺……確か未確認に襲われてて」

周りを見渡すが、文字通り何も無い。

自分を襲った未確認はおるか、自分以外は全く何も存在していなかった。

わけが分からず雄介が途方に暮れていると……

？

「久しぶりですね。リク」

突然後ろから聞こえた声に、雄介は慌てて振り返る。

振り返った先には全身に黒い服を着た若い男が立っていた。肩まで伸びた髪の毛と端正な顔立ちは、一瞬女性に見えてしまったほどだ。

雄介

「えっ、リク？あの、俺は……」

？

「……そうか、確かに“君”と会うのはこれが始めてですね」

謎の青年は言い終わると、雄介に手を翳した。

雄介

「えっ、何？」

？

「……私を遥かに越える力を持つ混沌が目覚めました」

青年は静かに呟いた。

雄介

「えっ？混沌？」

青年の言葉の意味が理解出来ず、雄介は更に混乱した。

？

「戦いを嫌う君に再び力を与えるのは間違っているのかもしれない。ですが…」

次の瞬間、雄介の身体が光だした。

雄介

「えっ、これは！？」

突然光り出した自分の身体に雄介は困惑する。

そして雄介の姿は光になって消えていった。

謎の青年は何も無い空を見上げて呟いた。

？

「生きなさい、リク。私が唯一選び、最も愛した人間よ」

雄介

「…ぐっ！？…あ…あれ？」

痛みで意識を取り戻すと状況は全く変わらず、窮地に立たされている



た。

グムンは雄介を一気に締め殺そうと、腕に力を込めるが異変が起きた。

グムン

「バビ!？」

雄介の腹部に変身ベルト・アークルが出現したのだ。

突然アークルが出現したことに動揺したグムンは雄介を離してしま  
う。

雄介

「ゲホッゲホッ!!これは!？」

破壊されたハズのアークルが出現したことに雄介は首を傾げたが、  
すぐに凜々しい顔付きに変わる。

しかし、雄介は一瞬変身することに躊躇した。

未確認生命体が再び出現し、自分は襲われている。

ならば一刻も早く変身して戦うべきだろう。

しかし、再びクウガに変身するとゆうことは、再び自分が最も嫌う  
行為、暴力による連鎖の中に飛び込むと言っことなのだ。

グムン

「ボンゾボギベー!リント!」

多少落ち着きを取り戻したグムンが、再び襲いかかってくる。

雄介は一息吸い込むと、再びかつてと同じ変身ポーズを構える。

そして……覚悟を決めて叫ぶ

雄介

「変身!!」

雄介は駆け出し、グムンにストレートパンチをぶつける。

次に左足でローキックを放つ。

グムン

「グガッ!?!」

雄介の勢いにグムンはたじろぐ。

すると、雄介の身体に変化が起きた。

雄介の身体が先程までとは全く違う形状に変化したのだ。

全身は黒く変化し、上半身は赤い装甲に覆われ、最後に頭部には2本の角が出現し、赤い大きな複眼が現れ、その姿は未確認生命体第4号・仮面ライダークウガへと変わる。

グムン

「クウガ!」

“ 仮面ライダークウガ ”

五代雄介が超古代の霊石・アマダムの力で変身した姿であり、超古代及び数年前の戦いでグロンギを倒し、人類を守った戦士である。

雄介が変身した赤い姿はマイティフォーム、格闘戦闘を得意とするクウガの基本形態である。

クウガ

「フン！ハアツ！」

クウガは Gum に向かって勢いをつけたパンチを連続して浴びせる。

怒涛の連続攻撃に、Gum は大した抵抗も出来ず吹き飛ばされた。

クウガ

「ハァー！！」

Gum

「ブボツ！！」

自分に向かって駆けるクウガの動きを止めようと、Gum は口から蜘蛛の糸を勢いよく吐き出す。

クウガ

「ハッ、まさか！？」

しかし、以前戦った経験から Gum の行動を予測したクウガは、ギ

リギリで身体を捻って回避しようとしたが完全には避けきれず、左腕に糸が巻きついてしまう。

予想とは外れたものの、自分の攻撃が成功したことにグムンは自慢げに笑う。

クウガ

「くっ！……は！そうだ！！」

クウガはとっさに思いついた行動を迷わず実行に移した。

クウガ

「ええーい！」

クウガは自分の左腕とグムンを繋げている蜘蛛の糸を力一杯引つ張った。

グムン

「バツ！？バンザド！！！？」

全く予想だにしていなかったクウガの行動に、グムンはされるがままに勢いよくクウガに引き寄せられた。

クウガも無理やり引き寄せられ、自分に向かって来るグムンに向かって駆け出し、勢いを付けたキックをグムの腹部に叩き込んだ。

キックを叩きつけられたグムンは吹き飛ばされ、地面に落下した。

グムン

「グヅ……ブボ……」

からうじて立ち上がったが、既にグムの腹部には封印エネルギーを叩き込まれた証であるクウガの紋章が光っていた。

グム

「ガアアアアアアアア！……！」

断末魔の雄叫びを挙げ、グムは爆散した。

雄介

「ハアハアハア……」

変身を解いた雄介はその場にしゃがみ込む。

変身しているときは意識していなかったが、やはり数年ぶりの変身は身体に大きな負担を強いていた。

雄介

「……未確認が……また……」

再び未確認生命体が現れたことに、雄介は言いよつの無い不安をその身に感じていた。

そして……雄介は気づかなかった。

自分を見ていた黒い影の存在に……



第2話 再来 7 / 17 加筆（後書き）

第3話 AGIT 再び 7/17加筆（前書き）

戦闘描写は本当に難しいです。



### 第3話 AGIT 再び 7/17加筆

レストランAGITO

かつて仮面ライダーアギトとして、人類の創造主・闇の力が率いた集団、アンノウンと戦った青年、津上翔一（本名・沢木哲也）が経営する西洋料理店である。

こぢんまりとした小さな店だが、美味しい料理と翔一の気さくな人柄が人気を集め、女性を中心に人気を集めている。

翔一

「うーん、どうしようかな」

そして今、津上翔一は開店前の厨房で深く悩んでいた。

？

「…翔一さん？どうしたの？」

腕を組んで悩み続ける翔一に声を掛けた女性の名前は旧姓、岡村加奈。

そして現在の名は津上加奈。

津上翔一の妻にして、レストラン・アギトのもう1人の従業員である。

かつて翔一の恩師の経営するレストランで知り合い、友好を深めたが、間もなく異変が起きた。

かつて人類の創造主・闇の力と対立した光の力が人類に与えた“アギトの力”

翔一の中に宿る物と同じ力を加奈も宿していたのだ。

一度は自らの持つ力に絶望しかけた加奈だったが、翔一に救われて考えを改め、前を向いて生きることを決めた。

その後、レストラン・アギトのオープンを期に結婚し、今に至る。

翔一

「いやあ、ちょっとね。今日のディナーのメニューを何にしようか迷って……………」

話しの最中、突如翔一は感じとった。

かつての戦いの時に感じていた“悪しき者”の気配を…………

加奈

「なっ、なに？今度はどうしたの？」

出会って以来、殆ど見たことのない翔一の険しい表情に加奈は若干困惑した。

翔一

「……………加奈さん、俺……………ちょっと行って来る！」

翔一は真剣な表情で加奈を見る。

加奈

「…わかった。気をつけてね」

長年の結婚生活で、加奈はこの顔になった翔一には何を言っても無駄だと悟り、心配して引き留めるよりも、信じて送り出すことに決めた。

翔一

「…ありがとう！」

翔一はその場から駆け出し、愛車のバイクに跨って走らせた。

レストラン・アギトより少し離れた場所にある河原。

この河原で遊んでいる少年の後ろで異変は起ころうとしていた。

？

「……………」

人類からはアンノウンと呼ばれた神の遣い、ロード怪人の1体、豹型の超越生命体・ジャガーR（以下、ジャガーR）が少年の背後から忍び寄り、襲いかかるうとしていたのだ。

ふと、背後の気配に気づき、少年は後ろを振り返った。

そして気づいた…

自分に迫る怪人に…

少年

「あ…あ…あ…あ…」

恐怖のあまり、動くことすらできない少年の様子など全く気に留めず、ジャガーRは少年に手を伸ばす。

？

「うおおおおお！！」

突如、何者かがジャガーRにタックルを喰らわし、少年に迫る手を止めた。

少年

「……お…お巡りさん？」

そう、偶々通りかかったであろう警察官が少年を守ろうと、ジャガーRに飛びかかったのだ。

警官

「キミ！早く逃げて！！」

警官の必死の叫びに頷き、少年はその場から駆け出した。

警官

「よし……うわっ！？」

少年が逃がせたことに安心したのもつかの間、ジャガーRは警官の身体を掴み、投げ飛ばした。

警官

「ハアハアハア、いったい何なんだコイツは！？ワームじゃないみたいだけど……」

この警官の名は加賀見新

かつて、秘密組織ZECTの開発したマスクドライダーシステム第5号・仮面ライダーガタックとしてワームと戦った青年である。

ワームとの闘いが終わった後は警察官として日々を過ごしていた。

加賀見は目の前の怪人が少年を追いかけないよう警戒していたが、良くも悪いもその心配は杞憂に終わることになる。

ジャガーRは逃げた少年には目もくれず、加賀見に襲いかかってきたのだ。

加賀見

「くそっ！こんな時に変身できないなんて！」

加賀見がガタツクに変身できない理由。

加賀見は今、この場に変身するために必要なベルトを持っていないかったのだ。

ベルトが無ければ、自身の相棒にして、ZECTのライダーシステムの特徴でもある昆虫型コア・ガタツクゼクターを呼び出したとしても変身はできないのだ。

もつとも、かつてのワームとの闘いが終わってからは、変身するとは全くなくなってしまったため、ベルトを持ち歩かないようになったのは仕方がないと言えるが、いざ必要な時に持っていないことに加賀見は心の底から後悔した。

そんな加賀見の気持ちなど全く関係なくジャガーRは、トドメを刺すべく加賀見に向けて鋭い爪を振り下ろそうとする。

・ブウウウウウン・

突然聞こえたバイクの音に反応し、加賀見とジャガーRが音のした方向を見ると、銀色のバイクに乗った何者かが自分達に向かって来ているのが見えた。

加賀見

「……！危険だ！一般人は来るな！！」

ふと、我に帰った加賀見は腹の底から叫んだ。

バイクに乗った男…津上翔一は離れた場所に居るアンノウンを確認し、気を引き締める。

すると、翔一の腹部に変身ベルト・オルタリングが出現した。

そして、バイクのアクセルを更に拭かし、叫んだ。

翔一

「変身！」

翔一の叫びと同時にオルタリングから光・オルタフォースが溢れ、翔一の身体は黒と金を基調とした戦士、仮面ライダーアギト・グランドフォームに変わる。

翔一のバイクもオルタフォースを浴び、赤を基調にしたアギトの専用マシン・マシントルネイダーに変化した。

加賀見

「か……仮面ライダー！？」

加賀見は自分の見たことの無い仮面ライダーの出現に驚愕した。

ジャガーR

「ア……ギ……ト!!」

アギトを見たジャガーRは、暗く低い声で呟き、アギトに向かって走り出す。

アギトはトルネイダーを加速させ、ジャガーRに体当たりした。

正面からトルネイダーの体当たりを食らったジャガーRは勢い良く吹っ飛ぶ。

アギトはトルネイダーから降り、構える。

起き上がったジャガーRは、アギトに向かって一直線に突っ込むが、アギトは流れるような華麗な動きで攻撃を避け、パンチを数発叩き込んでジャガーRを怯ませた。

更に怯んだ隙を付き、勢いを付けたキックを叩き込んで吹っ飛ばした。

ジャガーR

「グウウウウ……」

ジャガーRは息絶え絶えにしながらも、なんとか立ち上がろうとする。

アギト



「……はああああ……」

アギトは頭部のクロスホーンを展開させ、腰を低く構える。

すると、アギトの足元に紋章型のエネルギーが出現し、アギトの両脚に吸収された。

ジャガーR

「グウウウウウ!!」

もはや自分の敗北を悟ったジャガーRは苦し紛れにアギトに向かって突っ込む。

アギト

「とおっ!!」

ジャガーRが駆け出したと同時に、アギトは空中に飛び上がり、必殺技・グランドライダーキックをジャガーRに向けて放った。

ジャガーR

「ガアアアアア!?!」

グランドライダーキックは直撃し、先ほどよりも更にジャガーRを吹き飛ばした。

ジャガーRはなんとか立ち上がるが……

ジャガーR

「グガアアアアア!!」

ジャガーRの頭上に光の輪が出現し、次の瞬間ジャガーRの身体は爆発した。

ジャガーRを倒したアギトは、トルネイダーに跨り、この場を去ろうとするが……

加賀見

「待ってくれ！」

傷だらけの加賀見が引き止めた。

加賀見

「た…助けてくれてありがとう！でも………教えてくれ！アンタは一体……」

・ブウウウウウ！・

アギトは加賀見の疑問には応えず、トルネイダーを走らせ、走り去った。

加賀見

「……何者だったんだ………いったい!？」

河原には加賀見の眩きだけが残された。

一方、変身を解いた翔一はアンノウンの復活に内心かなり動揺して

いた。

翔一

（なんでアンノウンがまた……、氷川さんや葦原さん、それに“他のみんな”にも知らせないと！）

アギトが去り、加賀美も帰った後の河原。

アギトとアンノウンの闘いを、離れた場所で見っていた青年は静かに呟いた。

？

「闇の力の遣いであるアンノウンまでも支配下に加わっているのか。……急いだ方がいいかもしれないな」

ゆっくり立ち上がり、青年は河原を後にした。

### 第3話 AGIT 再び 7/17加筆（後書き）

いきなりですが、今から様々なアイデアを募集します。

オリジナルのライダーや怪人や闘いの組み合わせなどです。

オリジナルライダー、及び怪人はアギト〜オーズまでの設定に準拠したものを願います。

闘いの組み合わせとは、“異なる作品のライダー、及び怪人の共闘・対決、こんなシチュエーションが見たい”というものを願います。

こちらの方は特に制限はありません。昭和〜平成まで自由な組み合わせで結構です。

アイデア全ての採用は難しいですが、可能な限り取り入れたいと思います。

随時受け付けますのでよろしければご一報下さい。

#### 第4話 人知れぬ闘い（前書き）

今回も短いですがご覧下さい。

## 第4話 人知れぬ闘い

鏡の中の世界・ミラーワールド

全てが鏡のように反転した世界。

13人の仮面ライダーによるライダーバトルが、終局を迎えても、ミラーワールドは消えることなく存在していた。

同士にそれは、ミラーワールドに生息し、人間を食料とするミラーモンスターも消えていないことを証明していた。

かつてライダーとして戦っていた者達はライダーだった記憶を失い、力も持っていない。

モンスターから人々を守る者は現在いなかった。

たった1人を除いて……

ミラーモンスター内部の繁華街。  
2つの影が争っていた。

？

「ガアアアア！」

争う影の片方、鳳凰型モンスター・ガルドサンダーは腕から伸ばした金色の触手で対戦相手に攻撃を仕掛けた。

ガルドサンダーの対戦相手、その姿は全身を赤いボディースーツで覆われ、額と腹部のベルトに龍の紋章を持ち、左手には龍の頭部を模した手甲・ガントレットを装着した戦士は、自分に襲い掛かる触手を手に持つ青竜刀型の武器で切り裂く。

彼こそ、かつてミラーワールドで戦った13人のライダーの1人、仮面ライダー龍騎である。

龍騎に変身する青年の名は城戸真司。

モバイルニュース配信会社・OREジャーナルに所属する新米ジャーナリストである。

正義感は強いが、何にでも首を突っ込まねば気が済まない典型的な巻き込まれ体質でもある。

龍騎はドラグセイバーと蹴りで触手攻撃をいなしながら、ガルドサンダーに突っ込む。

龍騎

「このヤロオオオオオオオオ!!!」

しかし、何故か龍騎はガルドサンダーに対して非常に怒っていた。

ガルドサンダー

「ガアア!?!」

勢いをつけた龍騎の鋭い斬撃がガルドサンダーを切り裂き、大きなダメージを与えた。

龍騎

「クッソー、許さねーぞお！俺のバイクぶっ壊しやがって〜！！」

龍騎の怒りの理由

それはこの戦いの前、ガルドサンダーが襲おうとしていた人を庇った際のことだ。

襲われそうになった人を助けることが出来たまでは良かったが、食事を邪魔されたことに怒ったガルドサンダーは、邪魔をした真司に攻撃してきたのだ。

その際、ガルドサンダーの触手攻撃が、真司の愛車のスクーターに直撃してしまったのだ。

長年愛用していた愛用を壊されたことが、龍騎の怒りの理由だった。

ガルドサンダー

「ガアアア！！」

龍騎

「おわっ！？はあっ！！」

ガルドサンダーは苦し紛れに突撃してくるが、龍騎は横に動いて回避し、すれ違いざまにパンチを叩き込んだ。

ガルドサンダーは龍騎の攻撃に悶絶し、片膝を着く。



ガルドサンダーが弱ったことを悟り、すぐさま龍騎は左手の手甲型  
召喚機・ドラグバイザーにカードを装填した。

〔FINAL VENT〕

？

「ガアアアアア！」

ドラグバイザーから電子音が鳴ると、赤い東洋の龍のような姿をし  
ている龍騎の契約モンスター・ドラグレッダーが舞い降りた。

龍騎

「ハアアアア！タアッ！」

龍騎が腰を低く構えると、ドラグレッダーと共に空高くジャンプ。

空中で回転しながらキックの体勢に入る。

龍騎

「とりゃあああああ！！」

龍騎の背後から、ドラグレッダーが炎を吹き出し、炎を浴びた龍騎  
はその勢いのまま、ガルドサンダーに必殺技・ドラゴンライダーキ  
ックを放つ。

ガルドサンダー

「ガアアアアアア！？」

ドラゴンライダーキックが直撃し、ガルドサンダーは爆発した。

龍騎

「ふう、終わったあゝ」

龍騎は肩の力を抜いた。

その言葉には闘いが終わった安堵感と、若干の疲れが含まれていた。約一年程前、“ある事情”によりかつての闘いの記憶とライダーの力を取り戻して以来、龍騎はたった1人で復活したモンスター達と戦い続けていたのだ。

いつ終わるとも知れぬ戦い。

以前のように、ライダー同士で戦うことが無くなったのは非常に喜ばしいことではあるが、終わりの見えないモンスターとの闘いに若干疲れているのは事実だ。

龍騎

「……俺らしくね、早く出よう」

龍騎は思考を切り替え、ミラーワールドから出ようとする。

？

「……ハアハアハア……うっ……」

龍騎

「…んっ!？」

龍騎がこの場を去ろうとした瞬間、荒い息遣いが耳に入った。

ふと、声のした方向を振り返ると、そこには全身が純白の馬のような姿をした怪人が、傷だらけの状態で立っていた。

龍騎

「なっ…なんだ、コイツ!？」

龍騎はとっさに身構えるが、怪人は若い青年の姿になってその場に倒れ込み。

龍騎

「に……人間の姿になった……、コイツ…ひょっとして…オルフェノク?」

“オルフェノク”

人類の進化形とも呼ばれ、一度死んだ人間が動植物の能力を得て蘇った姿である。

龍騎は前述の“ある事情”の際に共に戦った仲間から、オルフェノクのことを聞いていたので、目の前の青年がオルフェノクだと気付いたのだ。

龍騎

「とにかく助けないと!!」

龍騎はオルフェノクだった青年を抱え上げる。

例え怪人の姿になろうが、龍騎にとってそんなことは関係ない。

モンスターのような最初から怪物だったならともかく、敵かも知れないとはいえ、元は人間であるオルフェノクを、傷つき倒れた状態で放置することなど龍騎には絶対にできない相談だった。

龍騎は青年を担ぎ上げ、ミラーワールドから出るために自分が入ってきた入口に向かう。

ミラーワールドではモンスター以外は長時間存在できない。

ライダーですら、制限時間9分55秒を過ぎてしまうと、体は粒子化して消滅してしまう。

龍騎は少し駆け足でその場を後にした。

離れた場所で龍騎が去るのを見ている者がいた。

全身は漆黒、右目の複眼とマフラーだけが赤く染まっていた。

？

「……そうか、わかった。…ああ、相手にしなくていい」

黒い戦士は誰もいない場所で喋っていた。

どうやらこの場にいない誰かと通信で会話しているようだ。

？

「……ああ、それと……」

黒い戦士は走る龍騎を見て、更に言葉を繋ぐ。

？

「……例のバイクを用意しておいてくれ。……ああ、龍騎用のヤツをな」

通信を終え、黒い戦士・仮面ライダーサノオはミラーワールドを去った。

## 第4話 人知れぬ闘い（後書き）

引き続き、オリジナルのライダー・怪人、様々な組み合わせの共闘・対戦のアイデア募集中です。

## 第5話 群れる狼（前書き）

今更ですが各回のタイトルには深い意味はありません。

殆ど思いつきで決めています。

## 第5話 群れる狼

バイクを押しながら歩く青年は、若干虫の居所が悪かった。

青年の名は乾巧。

かつて、巨大企業・スマートブレイン社に率いられた人類の進化系・オルフェノクのと戦った戦士・仮面ライダー555（ファイズであり、巧自身も狼の性質を持つウルフルフェノクでもある。

現在巧は、以前使用していた赤いバイクを利用していた。

そして今、巧を苛立たせている理由とは……

？

「もー！アンタのせいで翔ちゃん達とはぐれちゃったじゃない！」

？

「だってだってー！雑誌モデルの麻生恵が歩いてたんだよ！私大ファンなんだもんー！！」

巧を間に挟んで、2人の女子高生が言い争う。

彼女達の名はクイーンとエリザベス

エコロジ―都市・風都に住む女子高生である。

因みに、先に喋った前髪を上げた少女がクイーン。



後に喋った巻き髪の少女がエリザベスである。

巧

（……………なんでこんなことになっちまったんだ……………）

巧はげんなりしながら、こうなった理由を思い出す。

巧

（確か俺は……………クリーニングした服を配達し終えて、帰る途中に迷子になってたコイツ等に道を聞かれて、教えても解らないとか言うコイツ等に無理やり案内させられて……………ハアア）

巧はまだ言い争う2人を見て、心の中で大きくため息を吐き、女子高生の勢いに圧された数分前の自分に激しく後悔した。

元々巧は人付き合いがあまり上手くない。

それなのに、気の強く口喧しい女子高生に挟まれて長時間過ごさなければならぬのは、正直苦痛だった。

クイーン

「…ねえ、ちゃんと聞いてる!？」

巧

「……………あつ？何をだよ？」

巧は後悔していた思考を切り替え、クイーンに振り返る。

エリザベス

「ちゃんと聞いててよ。私とクイーンのどっちが悪いかって話！」

2人の喋りの勢いに巧は再び圧倒されそうになる。

巧

「し…知るか！そんなこと！」

エリザベス

「えー！？ヒドい！！！」

クイーン

「女の子の話を聞いてないなんてサイテー」

巧

「ぐっ……、お前等なあ！」

さすがに我慢できなくなり、反論しようするが…

？

「オイ、アンタ…、乾巧だよな？」

巧

「んっ！？」

突然、後ろから掛けられた声に中断された。

振り向くと、スーツ姿の男が立っていた。

クイーン

「ナニ？知り合い？」

突然男が現れたことに、クイーンは巧に尋ねるが……

巧

「……お前等、逃げる」

エリザベス

「えっ？どうゆうこと？」

怪訝に思っエリザベスを無視し、巧は2人を庇うように前に出る。

目の前の男の正体を、巧は長年の経験から瞬時に察していた。

男

「ベルトを寄越せよ、ファイズのベルトを！」

男が叫べと、目は白く染まり、顔に異形の影が浮かぶ。

そして次の瞬間、男の姿はオコゼの特徴を持つオルフェノク、ステイングフィッシュオルフェノク（以下SFオルフェノク）に変わる。

クイーン

「キャー！？な、何これ！？」

エリザベス

「ど…ドーパント！？」

人間がオルフェノクに変化したことに恐怖し、2人は悲鳴を挙げる。

巧

「早く逃げろ！」

巧はSFオルフェノクに立ち向かうが、当然ながら人間のままでは太刀打ちできず、投げ飛ばされる。

巧

「くっ……」

起き上がりながら巧は自分の手のひらを見る。

巧の手のひらは僅かに、しかし確かに灰化していた。

巧を含め、全てのオルフェノクは急激な進化のスピードに体が追いつかず、いずれ体が灰化し、死す運命にあるのだ。

巧の体も今、少しずつではあるが確実に灰化が進んでいる。

SFオルフェノク

「先にお前から潰しとくか」

影に映った変身前の男が嘲笑いながら呟き、SFオルフェノクは巧に向かってゆっくり歩き始める。

巧は一瞬躊躇うが、すぐに気持ちを切り替える。

巧

「オイ！バイクの後ろのトランクを俺に投げろ！」

巧は恐怖で呆然としていたクイーンとエリザベスに向かって叫んだ。

エリザベス

「えっ！？な、何！？」

巧

「後ろのトランクだ！とつとと投げろ！」

クイーン

「わ…わかった！」

考えるより先に動いたクイーンが、トランクを巧に向かって投げる。

巧

「よし！」

巧は飛び上がって空中でトランクを受け止める。

トランクから変身ベルト・ファイズギアを取り出し、装着しようとするが……

S F オルフェノク

「させるかよ！ついでにベルトもいただくぜ！」

S F オルフェノクは巧に猛スピードで接近し、襲いかかる。

- バババババババ -

S F オルフェノク

「ぐああああ!？」

しかし突如、空中から無数の銃弾が放たれ、S F オルフェノクの体は火花を挙げる。

S F オルフェノク

「グアアア!？だ、誰だあ!？」

巧

「な、なんだ!？」

巧が見上げた先に居たのは……

さかのぼること数分前

巧達がオルフェノクの男に遭遇した頃

少し離れた場所に“スマートブレイン製の特殊バイク”に乗った男が到着した。

倭

「…何とか間に合ったようだな」

バイクに乗った男、神夜倭は少し離れた場所で起こる状況を確認・把握し、静かに呟いた。

倭

「バラバラの状態から再生するのには骨が折れたが……そのかいはあつたようだな」

倭はバイクから降り、燃料タンクの上にある　のマークを押した。

するとバイクは、人型に変形し始める。

このバイクの名はオートバジン。

かつてのオルフェノクの王、アークオルフェノクとの戦いで破壊された仮面ライダーファイズの専用マシンである。

倭

「さあ行け、バジン！お前の主人の下へ！」

倭の言葉を聞き、オートバジンは飛び去った。

突然現れたかつての相棒に巧は茫然としてしまう。

巧の心境を知ってかしらるか、オートバジンは巧の目の前に降り立ち、SFオルフェノクに立ち向かう。

オートバジンは重量パンチを繰り出しSFオルフェノクに叩き込む。  
重量級のパンチを受けたSFオルフェノクは、火花を散らしながら  
吹き飛ばされた。

## 【STANDING BY】

巧は気を取り直し、ファイズドライバーを腰に装着し、ファイズフ  
オンを開き、変身コード【555】を入力し腕を上げる。

巧

「変身！」

## 【COMPLETE】

ファイズフォンがドライバーにセットされると、ベルトから赤い光  
の帯・フォトンストリームが巧の全身を駆け巡り、かつてオルフェ  
ノクの王から人間を守った戦士、仮面ライダーファイズに変わる。

エリザベス

「えっ！？ウソ……アレって……仮面ライダー？」

クイーン

「でも風都にいるのとは全然違うじゃない！？」

戦いの場から少し離れた場所に避難し、事態を見守っていたクイー  
ンとエリザベスは、巧が全く違う姿に変身したことに驚きを隠せな  
い。

更にファイズの姿が、自分達を知る仮面ライダー、Wとは全く違う



姿だったので尚更だ。

ファイズは右手をスナップさせ、SFオルフェノクに向かって走り出す。

ファイズ

「おらぁー!!」

勢いを付けたパンチを皮きりに、ファイズは両腕のパンチを交互に叩き込む。

SFオルフェノク

「ぐあっ!？」

ファイズの容赦のない猛攻にSFオルフェノクはたじろぐ。

ファイズ

「ハア！」

更にファイズは、キックをSFオルフェノクの腹部目掛けて繰り返し出す。

SFオルフェノク

「ぐっ……………」

腹部にキックをまともに受けたSFオルフェノクは片膝を付くが、ファイズは追い討ちを掛け、蹴り飛ばす。

SFオルフェノクはうつ伏せに倒れるが、ファイズは容赦なく蹴りつける。

まるでチンピラのケンカのような戦い方だが、これが巧の変身したファイズの戦闘スタイルなのだ。

ファイズは右足首にトーチ型ツール・ファイズポインターを装着し、ベルトのミッションメモリーを挿入する。

更にファイズフォンのENTERを押す。

【EXCEED CHARGE】

ファイズ

「ハア！」

ファイズは助走をつけて駆け出し、空高くジャンプする。

空中で大きく前方宙返りすると、ファイズポインターから円錐形のポイントマーカーがSFオルフェノクに向けて放たれる。

ファイズ

「オリヤア！！」

ファイズが飛び蹴りの体勢でポイントマーカーに飛び込み、仮面ライダーファイズの必殺技・クリムゾンスマッシュがSFオルフェノクに炸裂した。

SFオルフェノク

「ぐあああああ！？」

クリムゾンスマッシュに貫かれ、刻まれたのマークと共にSFオ

ルフェノクは青い炎と共に灰になって消滅した。

ファイズ

「……ふう」

戦いを終え、ファイズは変身を解き、巧の姿に戻る。

心なしか、その表情には晴れない。

クイーン

「ねえねえ！アナタ、仮面ライダーだったんだね！」

巧

「……はっ？」

エリザベス

「ありがとう！助けてくれて！」

クイーンとエリザベスは先程の恐怖もすっかり忘れ、興奮した様子で巧に寄って来る。

巧

「……知らねーよ。」

巧は、自らを仮面ライダーと名乗ることは無い。

仮面ライダーとゆう言葉の意味も、“1年前のある戦い”の際に知ったものだ。

巧が自らをライダーと名乗らない理由。

それは“世界を守る戦士”、仮面ライダーが自分に当てはまるとは思えなかったからだ。

自分は、人間を守るために戦いはしたが、正義の戦士等では無いと巧は思っている。

かつて巧が戦ったオルフェノク達は、人の心を失ってしまった者が殆どだったが、中には人間として生きようとしていた者も居た。

長田結花や海堂直也、そして友だった木場勇治がそうだった。

そして心を捨てた者の多くは、人間から迫害されたり力に溺れてしまった者だった。

自分も一歩間違えていれば、彼等のようになっていたかもしれない。

そして心を捨てたとしても、そんな彼等を“殺し続けた”自分が仮面ライダーだとは、巧にはどうしても思えなかった。

巧

「……とにかくお前ら、今日起きたことはぜってー誰にも言っなよ」

エリザベス

「ええ〜！？なんで〜？せっかくブログに書こうと思ったのに〜！」

クイーン

「アタシもツイッターに書こうと思ったのにー！」

クイーンとエリザベスは不満げに巧に詰め寄る。

巧

「ぜってー駄目だ！知られたくねえことなんだよ！いいか！？絶対言うなよ！」

巧は2人を睨んで念を押す。

エリザベス

「ううゝ、わかったよゝ」

クイーン

「…はい。わかりましたー」

2人は残念そうにながらも、渋々了承した。

クイーン・エリザベス

「その代わり！」

—安心した巧に、今度は2人が声を揃えてきた。

クイーン

「何か美味しいもの、食べたいなあゝ」

エリザベス

「あっ！ワタシちょうど行きたいお店あるんだあゝ！」

クイーン

「わかった！この近くのレストランでしょー！美味しいってウワサのー！」

巧

「なっ……お前ら、ちょっと待て！」

自分を見殺しにして勝手に進む話を止めようと、今度は巧が2人に詰め寄るが……

クイン

「黙っててほしいんだよねー」

エリザベス

「だったら何か欲しいよねー」

2人は力強い眼差しで巧を見る。

巧

「うっ……わ……わかったよ」

2人の迫力に圧され、今度は巧が渋々了承した。

クイン・エリザベス

「ヤッター!!!」

2人はガッツポーズを決めて喜ぶ。

落胆する中、巧はふと駆けつけたかつての相棒を見た。

既にオートバジンはバイク型のビークルモードに戻っている。

巧

（いったい誰がコイツを……）

破壊されたはずの相棒を修復し、自分に届けたのは誰なのか……

ここ数年沈静化していたオルフェノクの活動再開、そして修復されたオートバジン。

巧の中には不安と共に、新たな疑問が次々に浮かんでいた。

第5話 群れる狼（後書き）



## 第6話 JOKER剥奪（前書き）

今回は今までで一番クオリティが低いかもしれません。

ああ、文才が欲しい〜

## 第6話 JOKER剥奪

日本から遠く離れたアメリカ・アリゾナの大地。

どこまでも続くように感じるほど広い荒野を、バイクが走っていた。

バイクを駆る青年の名は剣崎一真。

かつて仮面ライダーブレイドとして、不死生命体・アンデッドと戦った青年である。

かつてのアンデッドとの戦いで剣崎は人類を守るため、そして戦いの中で出会った親友・相川始のため自ら人を捨て、始と同じアンデッド・ジョーカーとなった。

ジョーカーとなった剣崎はアンデッドの闘争本能と戦うため、全ての関わりを断ち切り世界中をさまよっていた。

油断すれば誰かに襲いかかってしまいそうになる衝動を抱えた剣崎には、誰とも触れあわず世界を彷徨うしかなかったのだ。

剣崎

「……………ん?」

剣崎は不穏な気配を感じ、愛車・ブルースペイダーを止めた。

バイクから降り、気配の元凶の存在を感じた剣崎は上空を見上げる。  
視線の先には黒い石板のような物体が空中に浮かんでいた。

剣崎

「……モノリス!!」

信じられないものを見たとしても言うように、剣崎の顔は驚愕に染まっている。

剣崎が驚愕するのも当然だろう。

53体のアンデッドによる、この地上の支配種を決める闘い・バトルファイトを監視する役目を持った石板・モノリスが数年振りに自分の目の前に現れてのだから。

- 第2のジョーカー確認 -

アンデッドしか聞き取れないモノリスからのメッセージが剣崎の頭の中に響く。

剣崎

(…!?)

剣崎は動揺しつつも身構えるが、続いてモノリスから届いたメッセージに更に言葉を失ってしまう。

- 新たな統制者の命によりバトルファイトを再開 -

剣崎

「な…なんだって!!??」

剣崎が叫ぶのと同時に、モノリスが輝きだす。

剣崎

「うつ!?!うわあああ!!!!!!」

モノリスの輝きに同調したかのように、剣崎の身体は激痛に襲われる。

次の瞬間、剣崎と融合していたスピードスートのアンデッドが封印されたカード、ラウズカードが剣崎の身体から離れ、次々にモノリスに吸い込まれていく。

剣崎

「う…あ…、せ、せめてこれだけでも…!!」

身体を走る激痛に耐えながらも腕を動かし、最後の1枚、変身に必要なカテゴリーAのカードだけは何とか確保する。

剣崎

「はあはあ…!!?こ、これ…は…!!?」

身体を引き裂くような激痛はいつの間にか引いていた。

しかし、剣崎は自分の身体の“異変”を感じていた。

剣崎

「……戻って……る…?」

剣崎は自分の身体から、長年闘い続けていたアンデッドの闘争本能が消えているのを感じていた。

『人間に戻れた』と思うのと同時に、『人間に戻ってしまった』と剣崎は思っていた。

“人間に戻る”とゆうことは、自分が人間を捨て、ジョーカーとなった選択が無駄になったことを意味しているのだ。

剣崎は複雑そうな表情でモノリスを睨む。

- 統制者の意思を受託 -

再び響いたモノリスのメッセージと共に次の瞬間、モノリスから黒い怪生物・ダークローチ（以下ローチ）が10体出現した。

剣崎

「…ダークローチ」

地上に降り立ち、自分を取り囲むローチに剣崎は身構える。

ローチは本来、バトルファイトにジョーカーが勝ち残った場合、世界をリセットするためにだけ現れる存在だ。

何故、新たにバトルファイトを開始すると宣言したのに、ローチを生み出したのかを疑問に思い、訝しげな表情を浮かべる。

一方、肝心のモノリスはダークローチが地上に降りると、光に包まれた。

剣崎

「ま、待て!!」

剣崎の制止の叫びは全く届かず、モノリスは光と共に消えてしまった。

ローチ

「ガアッ!」

剣崎

「!?!?…ちっ!」

飛びかかって襲ってきたローチの攻撃を、剣崎は横に飛んで避わす。

剣崎

「はあ!」

すれ違いざまに蹴りを打ち込み、ローチを蹴り飛ばす。

ローチ

「ガガアッ!?!」

蹴り飛ばされたローチは他のローチに激突し、豪快に転ぶ。

つい先ほど、アンデッドではなくなってしまった剣崎だが、その身体能力はアンデッド化の名残なのか通常の人間とは比べ物にならない程向上していた。

ローチ

「ガアア…!」

剣崎の強さを本能で感じ取ったのか、ローチ達は警戒し距離をとる。

剣崎

「この戦い、早めに終わらせてもらおう！」

ローチ達を見渡し、剣崎は懷から変身ベルト・ブレイバックルを取り出した。

1枚だけ確保したスペードのA・【CHANGE】をバックルに装填すると、カード状のベルト・シャッフルラップが展開し、ブレイバックルが剣崎の腹部に装着される。

剣崎

「はあああ、変身！」

変身ポーズを構え、両腕を交差させバックルのサイドレバーを引く。

【Turn Up】

バックルが回転すると同時に、スペードAの絵柄が投影された青いエネルギースクリーンが剣崎の前方に出現した。

剣崎

「うおおおおお！」

剣崎がスクリーンに向かって駆け出す。

スクリーンを抜けると、剣崎の姿はヘラクレスオオカブトをモチー

フとした戦士・仮面ライダーブレイドに変わる。

ブレイド

「うえええい！」

ブレイドは腰から醒剣・ブレイラウザーを引き抜き、ローチを次々に切り裂いていく。

ローチ

「ガア！？」「ガガア！！？」「ギアアツ！？」

長年の戦闘で得た戦闘経験は、ブレイドから無駄な動きを減らし、的確な斬撃でローチ達を次々に斬り捨てていく。

気が付けば、10体いたローチは3体にまで減っていた。

ローチ

「「ガア！」」

ブレイド

「なに？」

劣勢に追い込まれた残りのローチの内、2体がブレイドの両脇に密着してくる。

恐らく2体で挟んだ動きを止め、残った1体がトドメを刺すつもりなのだろう…とブレイドは冷静に予測していた。

ローチ

「ガアアツ！！！」



ブレイドの予測通り、最後に残った1体が飛び上がり、鋭い爪を振り下ろそうとする。

ブレイド

「よし、それなら！」

しかし、ブレイドは敢えて身体から力を抜いた。

ブレイドが突然力を抜いたことにより、ローチ達はバランスを崩し、前方に移動させられる。

D

「ギッ!?」「ガアッ!?」

振り下ろされた爪はブレイドの思惑通り、仲間のローチを切り裂いた。

ブレイド

「よし!うえええい!」

ブレイドは敵が動揺している隙をつき、ブレイラウザーを一閃させローチは呆気なく全滅した。

ブレイド

「……………」

ブレイドは何も言わず、バックルのレバーを引いて剣崎の姿に戻る。

剣崎の顔には敵を倒した達成感など微塵も無く、新たなバトルファ

イトの到来を知ったことによる不安が浮かんでいた。

剣崎

「戻るか……、日本に……」

心中の不安を無理やり振り払い、バトルファイトの舞台になるであろう故郷・日本に戻ることを決意する。

剣崎

「……ん？」

ブルースペイダーに跨り、この場を離れようとした剣崎の耳にある音が聞こえてきた。

・ブウウウウウン・

剣崎

「……バイクの音？」

しっかりと舗装された道路ならともかく、剣崎が今いる場所は人通りなど全く無いアリゾナの荒野のど真ん中。

そんな場所で聞こえたバイクのエンジン音が気になり、剣崎は耳を澄ます。

・ブウウウウウウン・

音はどんどん大きく近づいて来ている。

何者かは分からないが、恐らく自分に向かって来ているのだろうと  
剣崎は感じていた。

周囲を見渡す限り、自分以外には、人はおろか建物や車の姿も一切  
見当たらない。

そんな場所で音がどんどん近づいているとゆうことは、ほぼ確実に  
自分に向かって来ているのだろう。

剣崎

（こんな荒野の真ん中で俺に向かって来てる。……一体何者だ？）

先ほどのモノリスの件もあり、剣崎は警戒したままブレイバックル  
を握り締める。

もし来訪者が敵だった場合、即座に対応するためだ。

剣崎

「……来た！」

音の原因であろう黒い大型のバイクが、自分に真っ直ぐ向かって来  
ているのを剣崎は目で確認した。

大型バイクは剣崎の目の前で停車する。

バイクに乗っている人物、体つきからして男であろう人物はヘルメ  
ットを脱ぎ、バイクから降りる。

剣崎

「お前は……神夜倭！」

バイクに乗っていた人物が、以前“ある戦いの中で知り合った”青年、神夜倭だったことを知り剣崎は驚く。

倭

「久しぶりだな、剣崎一真」

剣崎

「な……何でアンタがここに……いや、何で“この世界に”！？」

混乱する剣崎の気持ちを知ってか知らずか……倭は不適に微笑んでいた。

## 第6話 JOKER剥奪（後書き）

引き続き、オリジナルのライダー・フォーム・怪人を募集しています。

## 第7話 駆け続ける鬼

- 鬼 -

それは心・技・体、全てに優れた人間が、自らを極限まで鍛え上げ肉体を変化させたモノである。

彼等は楽器を模した武器を使い、日夜人知れず戦っている。

奥深い山の中を、1人の男が走っていた。

見た目30代半ば程のその男は、軽やかな足取りで舗装もされていない獣道を軽々と超えて行く。

彼の名はヒビキ。本名・日高仁志。

鬼の活動をサポートする組織・猛子の関東支部に所属する12人の鬼の1人であり、既に鬼として20年近く活動しているベテランである。

ヒビキ

「…ん？」

ふと、ヒビキは何か邪悪な気配を感じ、歩みを止める。

それはヒビキにとっては嫌な意味で馴染み深いものだった。

？

「…鬼か？」

？

「…鬼だ」

不気味に囁きながら、黒と白のコートのようなものを羽織っている男女が木陰から現れる。

黒コートの男

「やっぱり鬼だ」

- 童子 -

白コートの女

「やっぱり鬼か」

- 姫 -

男女は陰険な感じで笑う。

身に纏った雰囲気に加え、男女で逆転した声の不気味さを更に際立たせている。

彼らは童子と姫。

魔化魍に餌を与えて育てる親のような存在である。

ヒビキ

「そっちから出てきたのは助かるな。手間が省けたよ」

口を動かしながら、ヒビキはポケットから変身に使う道具、変身音叉・音角を取り出す。

ヒビキ

「変身」

音角を手近な木で叩いて鳴らし、額に近づける。

音角から発せられる音波を受けると、ヒビキの額に鬼の面が現れ、身体は紫色の炎に包まれる。

童子

「鬼め！」

- 怪童子 -

姫

「やらせない！」

- 妖姫 -

童子と姫は蜘蛛の意匠を持つ戦闘形態、怪童子と妖姫に姿を変えヒビキに襲いかかる。

ヒビキ



「ハアアアアア、ハアッ!!」

ヒビキは気合いを込めた叫び声を挙げ、腕で炎を振り払う。

怪童子

「くっ!?!」

妖姫

「ぐあっ!?!」

怪童子と妖姫はヒビキが腕を払った勢いで吹き飛ばされた。

そして炎が収まり、ヒビキの姿は紫色を基調とした太鼓の鬼、響鬼こと仮面ライダー響鬼に変わった。

- 響鬼 -

ヒビキ

「ツチグモの童子と姫か。それじゃあ、いつちよやりますか!」

響鬼は腰に装備した太鼓の撥型の武器、音撃棒・烈火に手を掛ける。

- 音撃棒・烈火 -

烈火を両手で持ち、起き上がりうとしていた2体に向かって駆け出す。

怪童子

「ハアッ!」

怪童子は右手を大きく振りかぶって攻撃するが響鬼はそれを難なく避け、烈火をがら空きになった懷へ叩きつける。

怪童子

「うつ！？」

身体に走る衝撃に怪童子は悶絶する。

相棒を守ろうと妖姫は、響鬼の後ろから攻撃を仕掛けようとするが、響鬼は直ぐに振り返り、

手の甲から4本のカギ爪を伸ばした状態でカウンターパンチ、鬼闘術・鬼ヅメを叩き込む。

妖姫

「がつ！？」

鬼ヅメをまともにくらい、妖姫がたじろんだ隙を響鬼は見逃さない。

響鬼

「てりゃあ！」

響鬼は烈火に炎を灯した状態で妖姫に叩きつける。

妖姫

「があっ！??？」

限界を超え、妖姫は木っ端微塵に崩れる。

怪童子

「おのれ〜!」

怪童子は女性の声で怨めしそうに叫び、破れかぶれに突っ込んで来る。

しかし、鬼として20年近く魔化魍と戦い続けている響鬼には、怪童子の攻撃はかすりもしない。

多くの魔化魍と戦った膨大な経験が身体を自然に動かしているのだ。

怪童子

「ハアツ!」

響鬼

「よっ、はっ!」

響鬼は怪童子の両腕から繰り出された攻撃を烈火で受け止め、弾き返す。

更にそのまま烈火を振り下ろし、怪童子を吹き飛ばした。

響鬼

「はあああああ、おりゃあ!」

烈火から炎の弾・烈火弾を放つ。

怪童子

「ぎゃあああああ!?!」

烈火弾が直撃し妖姫と同様、怪童子の身体も木っ端微塵に碎け散る。

ヒビキ

「さてと、早くツチグモを見つけないとな」

響鬼は変身を解かずに走りだす。

響鬼

「おいおい、なんだありゃ？」

見つからないように、林に身を隠してしゃがみこむ。

先程の童子と姫が育てていた魔化魍・ツチグモは予想より早く見つかった。

しかし、それは響鬼にとって“かなり予想外な形で”だった。

- ツチグモ -

名前通りの巨大な蜘蛛の化け物・ツチグモは“魔化魍とは別の怪物”と行動を共にしていたのだ。

ツチグモ同様、蜘蛛の姿をしているがどこかメタリックな意匠を持

ち、7メートル程のツチグモよりは一回り小さい5メートルの怪物はツチグモと共に歩を進める。

それは明らかに異常な光景だった。

本来魔化魍は本能のみで行動し、親である童子と姫以外の目に付くものは全て攻撃しようする筈なのだ。

なのに目の前のツチグモは、そんな素振りは見せない。

しかし、響鬼にはもう一つ、驚く理由があった。

響鬼

「あれは確か……ミラーワールドのモンスターだよな。なんでここにいるんだ？」

もう一体の蜘蛛型の怪物・デイスパイダーを見た響鬼は呟く。

「デイスパイダー」

響鬼は以前、“こことは違う世界”でミラーワールドのモンスターと戦ったことがあったのだ。

響鬼

「……まっ、考えてても埒があかないか」

響鬼は静かに立ち上がる。

元々自分は、魔化魍を退治しに来ているのだ。

それに魔化魍にしるモンスターにしる、放っておけば確実に人を襲うだろう。

ならば自分のすることは、人々を守るために2体の怪物を倒すことだ。

響鬼は静かに烈火を構える。

ツチグモもデイスパイダーも、響鬼にとってはさほど大した相手ではない。

しかし、2体を同時に相手にする以上、油断はできない。

ならば定石通り、まず片方の敵から倒すべきだろうと響鬼は考えていた。

更に相手がこちらに気付いていない以上、奇襲を仕掛けるのがベストだろう。

響鬼はデイスパイダーを見る。

響鬼

（まずはモンスターからの方がいいな）

響鬼がデイスパイダーから倒すことにした理由。

それは魔化魍の特性に理由がある。

魔化魍は鬼が持つ音撃武器から放つ【清めの音】を叩き込まなければ

ば倒せないのだ。

響鬼の場合、清めの音を叩き込むには至近距離まで接近しなければならぬ上、短くても数十秒掛かってしまうのだ。

ならば、倒すのに清めの音を必要としないデイスパイダーから倒すのが最善なのは明らかだ。

響鬼

(…よし)

意を決し、響鬼は烈火弾をデイスパイダーに向けて放つ。

ツチグモ

「キイイイイ！？」

デイスパイダー

「ガアアアア！？」

突然襲来した攻撃に、2体は周りを見渡す。

響鬼は2体が狼狽している隙を見逃さない。

響鬼

「ハアアアア…」

走りながら、片方の烈火を両手持ちに切り替え、烈火の先端から炎を剣の形に押し固めた武器、烈火剣を出現させる。

- 烈火剣 -

響鬼

「てりゃああああ！」

ジャンプして飛び上がり、デイスパイダーを斜めに一刀両断する。

デイスパイダー

「ガアアアアアア！？」

両断されたデイスパイダーは地面に屈し、動かなくなる。

響鬼

「よっしゃ、ようやく本業だ」

デイスパイダーが動かなくなったことを目で確認し、ツチグモと対峙する。

この時、響鬼は気付いていなかった。

デイスパイダーの身体が爆発せずに残ったままだとゆうことに……

ツチグモ

「キイイイイー！」

ツチグモは長い爪を振り下ろし、響鬼に襲いかかる。

響鬼

「よっ、はっ！」



響鬼は烈火でいなしながらツチグモの身体の下に入り込む。

装備帯に装着した音撃鼓・爆裂火炎鼓をツチグモに装着しようとするが……

シュツ！

響鬼

「…ん？何だ……！？」

いつの間にか爆裂火炎鼓を持った右腕に蜘蛛の糸のようなものが絡みついている。

これでは火炎鼓を装着できない。

ツチグモ

「キイイイ！！」

響鬼

「あつ！やばっ！」

ツチグモの脚が自分に向かっていているのに気づき、響鬼は咄嗟の判断でツチグモの脚の隙間に飛び込んで距離をとった。

響鬼

「くっそ、倒したと思って油断しちゃったな」

響鬼は既に自分の右腕に糸を巻き付けたであろう相手に気がついていた。

響鬼は先程倒したと思っていたデイスパイダーを見る。

デイスパイダー？

「ガアアアア！」

倒したと思っていたデイスパイダーはいつの間にか復活していた。

- デイスパイダー -

しかも、頭部からは人型の上半身が生えた強化体、デイスパイダー・リ・ボーンとして…

- リ・ボーン -

響鬼

「アララ、ちょっとヤバいかもな…」

飄々とした態度を保ちながらも、響鬼はかなり危険を感じていた。

両手が使えればまだ何とかなるが、右腕は音撃鼓を持ったまま蜘蛛の糸で固められている。

さすがに2体を同時に相手にしながら右腕の糸を片付けるのは少し難しい。

絶体絶命とゆうわけではないが、骨の1、2本は覚悟しなければならぬようだ。

響鬼

「…まっ、やるしかないか！」

響鬼は覚悟を決め、構えるが……

「ブウウウウウン！」

ツチグモ

「キイイイ！？」

デイスパイダーR

「ジャアアアア！？」

響鬼

「なっ……なんだ！？」

突然近くの水溜まりから銀色の涙線型のマシンが飛び出し、2体の怪物を吹き飛ばさした。

響鬼

「あれ！？これって確か……真司が乗ってたヤツか？」

以前、別の世界で共に戦った仲間が使っていたマシン・ライドシューターの出現に響鬼は『仲間が来てくれた』かと期待した。

しかし、現れたのは響鬼の想像とは違っていた。

？

「やーれやれ、なんか面倒そうなことになってるね」

ライドシューターから現れたのは緑色のボディスーツにメカニカルなボディアーマーを身に纏った戦士。

- 仮面ライダー -

かつてミラーワールドで戦った13人のライダーの1人、仮面ライダーゾルダだった。

- ゾルダ -

響鬼

「あれ？真司じゃなかったのか…」

響鬼は右腕の糸を取りながらゾルダに駆け寄る。

ゾルダ

「ん？何？おたく、あのバカの知り合い？」

その言葉に響鬼は笑う。

端から見ればバカ呼ばわりするのは酷いことだが、彼らの共通の知人である城戸真司をよく知る者は尊敬の意味も込めて、真司をバカと呼ぶのだ。

中には侮蔑の意味を込める者もいるが……

以前の戦いでも城戸真司をバカと呼んでいた“ぶつきらばうな青年”と“天の道をゆく青年”のことを思い出し、つい笑い声がこぼれてしまう。

響鬼

「まっ、細かい話は後だ、手伝ってもらっていいかな」

響鬼は起き上がろうとしているツチグモとデイスパイダーRを指す。

ゾルダ

「OK。ま、元々そのために来たんだしね」

響鬼は烈火を、ゾルダは銃型召還機・マグナバイザーを構え、それぞれの専門の敵に向かって駆け出す。

ゾルダはデイスパイダーRに向けてマグナバイザーを連射する。

デイスパイダーR

「ギイイイイ!!」

ゾルダ

「おっと!」

デイスパイダーRが糸を吐き出すがゾルダは難なく避ける。

糸を使った攻撃が通じないことを察したのか、デイスパイダーRはゾルダに接近を試みる。

しかし、ゾルダはそれを許さない。

ゾルダ

「近寄るなよ、接近戦は趣味じゃないんだ」

【SHOOT VENT】

カードをマグナバイザーに装填すると、電子音と共にゾルダの身長  
の約1.5倍はあるだろう超長距離砲・ギガランチャーが出現する。

- ギガランチャー -

ゾルダ

「じゃあな」

ゾルダが言い終わると同時に、ギガランチャーから超高圧エネルギー弾が発射された。

デイスパイダーR

「ガアアアアアアア！？」

ギガランチャーの直撃を喰らい、デイスパイダーRは爆散した。

響鬼

「よっ、はっ！」

響鬼はツチグモの攻撃を回避しながら先程と同じように、接近を試みる。

先程と違ってツチグモ1体だけに専念できるため、余裕を持って回避できる。

途中、烈火で攻撃を受け流しながら懐に入り込み、今度こそ爆裂火炎鼓を装着する。

装着された火炎鼓は巨大化し、ツチグモはその反動でひっくり返る。

響鬼

「よし！」

響鬼はツチグモの上に飛び乗り、両手を上げて構える。

響鬼

「音撃打、火炎連打の形！」

- 火炎連打の型 -

響鬼は左右の烈火を交互に叩いてゆく。

爆裂火炎鼓によって強化された清めの音は、ツチグモの身体の内側にまで響いてゆく。

響鬼

「はああああ、はあっ！」

最後に左右同時に打ち込まれたツチグモは、大量の葉になって崩れる。

ゾルダ

「やるねえ」

戦闘を終えたゾルダが響鬼に声を掛ける。

響鬼

「鍛えてますから」

響鬼は人差し指と中指を立て、敬礼のような状態から手首を回した。

《戦闘終了後》

響鬼は顔だけ変身を解いて素顔を露わにしていた。

ゾルダも変身を解き、黒も白にされると言われる敏腕弁護士、北岡秀一の姿に戻る。

ヒビキ

「さっきはありがとう、助かったよ」

ヒビキは右手を差し出す。

しかし北岡はバツが悪そうに手を振った。

北岡

「あー、悪いけど俺そうゆうの苦手だよな。それよりもその姿、アಂತもライダーなわけ？見たとこ、神崎が作ったのとは大分違う



みたいだけど……」

北岡は自分の感じた疑問を尋ねてくる。

すると、今度はヒビキの方が言い淀む。

ヒビキ

「うーん、なんて言ったらいいかな。あつ、そうだ！君、真司の知り合い何だろ？今度真司と一緒に浅草にある【たちばな】って甘味所においでよ。そのときにじっくり説明するよ」

ヒビキの言葉を聞いた北岡は若干顔をしかめる。

北岡

「……悪いけど、遠慮しとくよ。城戸と一緒に外食なんてごめんだしね」

北岡はそう言うとポケットから名刺入を取り出し、ヒビキに名刺を渡す。

ヒビキ

「へえ、北岡秀一君？弁護士なんだ。へえ」

ヒビキが素直に感心していると、北岡は踵を返して歩き出す。

北岡

「暇な時でも連絡しなよ。仕事の話もOKよ。高いけどね」

ヒビキ

「ああ、ありがとう。今度連絡するよ」

北岡は「よろしく」と付け足し、その場を去った。

ヒビキは北岡の姿が見えなくなると、さっきの戦闘のことを考える。

何故魔化魍とモンスターと一緒に居たのか…

何かが起ころうとしているのかもしれない。

かつてのオロチ現象を超えるような何かが……

そんな胸騒ぎを、ヒビキは感じていた。

ヒビキ

「何かが起きようとしてるのかもしれないな。 “みんな”を集めて相談してみるか。久しぶりに会いたいしな」

ヒビキは“かつて共に戦った仲間達”のことを思い浮かべ、下山した。

## 第8話 天の道、再び（前書き）

今更ですが、主人公であるはずの倭が殆ど出てこない……これで良いのだろうか！？

## 第8話 天の道、再び

喫茶店アミーゴ

かつて1号〜ストロンガーまでの7人の仮面ライダーから父のように慕われた人物・立花藤兵衛が経営していた喫茶店である。

？

「…旨い」

アミーゴの店内、カウンター席に座る青年は優雅な佇まいで手にしたコーヒークップを置いた。

倭

「そうか、ありがとう」

調理場に立つ神夜倭は、洗い物をしながら青年に微笑んだ。

現在アミーゴは倭が運営を引き継ぎ経営していた。

？

「それほどの腕前ならば心置きなくコイツを渡せる」

青年は藤兵衛直伝の倭の焙煎技術を高く評価し、足下に置いていた大型のダンボールをカウンターに置き、蓋を開ける。

倭

「ほう、ブルーマウンテン。それもかなり上物だな」

？

「ふつ、蓋を開けただけでわかるとは…流石だな」

倭

「いいのか？」

？

「ああ」

青年が答え、また静寂がアミーゴを包む。

コーヒーを飲み終えた青年は立ち上がり店から出ようとする。

倭

「すまないな。大したもてなしも出来なかったのに、こんな上物を頂いてしまつて」

倭の言葉に、青年は立ち止まり右手の人差し指を上突き上げる。

？

「おばあちゃんが言っていた。借りができたら必ず特盛りにして返せつてな。まだまだお前には大きな借りがある」

青年は沈痛な表情で倭を見た。

倭

「まあ……気にするなとは言えんが…あまり囚われるな。ヤツが相

手ならば仕方なかったかもしれん」

倭も、先程の穏やかな面もちから真剣な表情に変わる。

・コツコツ・

倭

「それより……行くんだろっ」

？

「……ああ」

2人の視線は外から店の窓を小突いている“赤いカブトムシ型のメカ”に向かう。

倭

「じゃあな、また来てくれ。おばあちゃんにもよろしく」

？

「フツ、伝えておいてやる」

青年は“本来の尊大な態度”に戻りアミーゴを出た。

青年が去った後、倭は調理場の隅に飾られた写真を見る。

写真には、14人の青年が周りを囲い中心には立花藤兵衛と幼い少年が映っていた。

写真に映っている人物は皆笑顔で、心を穏やかにする雰囲気がある。

倭にとってこの写真は宝物と言えるくらい大切な物。

人の心を持たなかった自分に手を差し伸べ、人外の怪物に堕ちてしまっただった自分を救ってくれた恩人達。

今もこの世界のどこかで、人知れずに人々を守るために戦っている英雄達と映った、数少ない大切な思い出の写真だ。

数分後、倭は写真立てを置いて店を出た。

アミーゴに隣接する立花モーターショップ。

アミーゴ同様、現在は倭が立花藤兵衛から経営を引き継いでいる。

倭はモーターショップのガレージのシャッターを開ける。

倭はガレージの奥の壁に手を翳す。

『照合確認シマシタ。扉を開キマス。』

機械的な音声が響くと、壁が消え下へ降る階段が露わになる。

薄暗い螺旋階段を倭は黙ったまま降りて行く。

階段を降りきり、目の前にある扉を開ける。

扉の先の部屋は正に“研究室”とゆう言葉を体現したかのような場所だった。

20～30mあるであろう広い室内には様々な機械が所狭しと並び、大型のモニターやカプセルが静かに稼動している。

ここはアミーゴ以外の、神夜倭のもう1つの仕事場。

世間には殆ど知られていないが、優秀な科学者としての顔も持つ倭が個人的に所有している世界最高の設備を持つ研究室である。

倭

「さてと」

倭は近くの椅子に座り、パソコンを開いた。

パソコンの画面には修復中とされる様々なメカの図面が表示されていた。



「キヤアアアア！！！」

逃げ惑う人々の悲鳴が響く。

昼下がりの繁華街は惨状と化していた。

理由ははっきりしている。

？

「キシヤアア！」

繁華街を我が物顔で歩くのは、緑色のサナギのような異形。

彼等はワーム

10年程前、渋谷に落下した隕石と共に地球に飛来した地球外生命体だ。

かつて、ワームへ対抗した秘密組織・ZECTの開発した“マスクドライダーシステム”に選ばれた戦士達に敗れ、滅びたはずだったが……

警官

「う、撃て！撃てえ！！！」

駆けつけた警官達は手持ちの拳銃を発射するがワームには全く通用しない。

警官

「う、うわああ!？」

それどころか逆に、ワームを自分達に誘い寄せる結果となってしまう。

その時、一体のワームの動きが止まる。

次の瞬間、ワームの外皮はボロボロに崩れ始め、蜘蛛の性質を持つ成虫体・アラクネアワームに脱皮する。

アラクネアワームは超高速移動能力・クロックアップを発動させ警官達の前から姿を消した。

警官

「き…消えた!？」

突然消えたワームに、警官達は戸惑うが…

警官

「うわあ!？」「ぎゃあ!？」「ひいつ!？」

次の瞬間、警官達の身体は宙に浮き近くの建物や地面に叩きつけられる。

警官達は自分達の身に何が起こったのか考える時間すら与えられず、あっさりと蹂躪されてしまった。

？

「う…く、くそ！」

唯一生き残った警官がフラフラになりながらも何とか立ち上がる。

彼の名は氷川誠。

かつて警視庁の未確認生命体対策班・S A U Lの一員として特殊強化装甲服・G 3、G 3 - Xシステムを纏った戦士・仮面ライダーG 3及び、G 3 - Xとして仮面ライダーアギト・津上翔一や、仮面ライダーギルス・葦原涼と共にアンノウンと戦った勇敢な刑事である。

たまたま今回のスクランブルの際に現場の近くに居たので駆けつけたのだが、状況は最悪だった。

自分以外の警官は全てやられ、残ったのは自分1人。

一方のワームは成虫体1体に幼虫体が4〜5体。

手元に有効な武器も無い。

氷川

（せめて…G 3システムがあれば…）

G 3及びG 3 - Xはアンノウンとの戦い以降、必要とされることはなかったため、現在は警視庁の地下格納庫に保管されている。

無いものねだりをして仕方がないが氷川は思わずにはいられなかった。

それ程に状況は絶望的だったのだ。

氷川

「くっ！」

近くに落ちていた銃を拾い、ワームに向けて撃つ。

しかし、当然のごとく全く通用しない。

そればかりかワーム達に自分の居場所を教える結果になってしまう。

アラクネアワームと複数の幼虫体がじわりじわりと氷川に迫る。

氷川

「はぁはぁはぁ、くそ！」

目の前に迫る命の危機に氷川は後ずさり死を覚悟していた。

- バンツ！ バキツ！ -

氷川

「……………えっ！？」

しかし、突然小さな乱入者が現れた。

突然現れた赤いカブトムシが素早い動きでワームに攻撃を仕掛ける。

氷川

「か……カブト……虫？」

突然現れ、自分の命を救った赤いカブトムシ・カブトゼクターを氷川は茫然とした面持ちで見ていた。

- カラン、カラン -

ふと聞こえてきたこの場に不釣り合いな下駄の音に氷川はおろか、ワーム達も音のした方向に振り向く。

？

「おばあちゃんが言っていた」

声の主は若い青年だった。

甚平姿に下駄。片手には豆腐の入ったザルとゆう変わった出で立ちの青年の姿は明らかにこの惨状の場には異質に写る。

しかし青年は周りの視線など全く気にも留めず、右手の人差し指を天に突き上げ、更に言葉を繋ぐ。

？

「俺は天の道を行き、総てを司る男。天道総司」

天道総司。

彼こそかつてワームから人類を救った男である。

天道が言い終わると、カブトゼクターは天道の右手に収まる。

腰にはいつの間にか銀色の機械のベルト・ライダーベルトが巻かれている。

天道

「変身」

【H E N S H I N】

カブトゼクターを装着すると、天道の姿はかつてワームから世界を救った戦士・仮面ライダーカブトの第一形態、重厚なアーマーを纏ったマスキッドフォームに変わる。

サナギ体

「キシヤアアアア！」

サナギ体はまとまってカブトに襲い掛かる。

カブトMF

「甘い」

しかしカブトはサナギ体の攻撃を完全に見切り、最小限の動きで避わしながら、自分の武器であるゼクトクナイガンの近接形態・アックスモード（以下、AM）ですれ違いに切り裂く。

ゼクトクナイガンAMでサナギ体を次々に切り捨てながら、離れた敵には銃形態・ガンモード（以下、GM）で的確に撃ち抜いてゆく。

氷川

「……凄い！」

氷川は驚愕していた。

それはカブトの戦い方に対してのものだった。

流れるような華麗な体捌き。

一部も無駄のない動き。

そのどれもが氷川にとっては驚愕だった。

気がつけば、20体近く居たサナギ体は数体にまで減っていた。

だが、ワーム達も馬鹿ではない。

生き残ったサナギ体達はカブトを取り囲み、一斉に攻撃体制に入る。

氷川

「あ…危ない！」

氷川は叫ぶが、カブトは全く動じない。

カブトMF

「キャストオフ」

静かに言い放ち、カブトゼクターのホーンを逆向きに倒す。

【Cast Off】

ゼクターからの電子音が鳴った次の瞬間、カブトの身体にエネルギーが走り、アーマが勢いよく弾け飛んだ。

サナギ

「キシヤアア!?!」

弾け飛んだアーマーが直撃し、ワーム達はアラクネアワームを除いて全滅した。

【Change Beetle】

倒れていたホーンが立ち上がり固定され、カブトは第二形態にして真の姿、ライダーフォームに変化した。

アラクネアワーム

「ガアッ!」

唸り声と共にクロックアップを発動させ、アラクネアワームは姿を消した。

カブト

「甘いな。クロックアップ」

【Clock Up】

ベルトの右腰のスイッチを押し、カブトもクロックアップを発動させる。



クロックアップを発動させた瞬間、周囲の景色は、まるで時間が静止したように止まる。

アラクネアワームはカブトに向かって突進してくるが、カブトは短剣型のクナイモード（以下、KM）に変えたゼクトクナイガンKMで先ほど同様、カウンターの要領でアラクネアワームを切り裂く。

アラクネアワーム  
「ガアアッ!!」

カブト  
「ふっ、はあっ!!」

アラクネアワームは反撃するが攻撃は全て見切られ、最小限の動きで回避される。

更にクナイガンKMの斬撃とパンチを交互に喰らい、数メートルたたき飛ばされた。

カブト  
「終わりだ」

【One Two Three】

カブトはカブトゼクターのフルスロットルスイッチを連続して押した。

カブト

「ライダー……キック!」

【R i d e r   K i c k】

ゼクターのレバーを往復させると、カブトホーンにチャージされたエネルギーがカブトの右足に集束される。

アラクネアワーム

「ガ…ガアアッ!!」

アラクネアワームは破れかぶれに突撃してくるが……

カブト

「はあっ!」

カブトの華麗な後ろ回し蹴りが炸裂し、アラクネアワームは爆発した。

煙が立ち込める中、右手の人差し指を天に突き上げたカブトが立っていた。

戦いが終わったことを確認し、氷川は痛みで身体を抑えながらカブトに近づく。

戦闘中はカブトの華麗な戦いに見入ってしまったが、あの緑色の怪物が何なのか、そして突然現れ自分を救ってくれた謎の戦士が何者なのかを、氷川は聞かすにはいられなかった。

氷川

「あ…あの、助けていただいてありがとうございます。あ……アナタは一体？それにさっきの怪物は一体？」

氷川は矢継ぎ早に問いかけるが、カブトは答えない。

氷川の質問には一切答えないままカブトは歩き出し、いつの間にか近くに待機していた専用マシン・カブトエクステンダーに跨る。

氷川

「ま……待つてください！」

氷川は慌てて駆け寄るが間に合わず、カブトはその場を去って行った。

氷川

「…何者だったんだ一体？」

その場には茫然と立ち尽くす氷川だけが残されていた。

## 第9話 変わらぬ・変わる戦い（前書き）

構想はあるんですが、文章に書くのは中々上手くいかないですね

## 第9話 変わらぬ・変わる戦い

時の列車・デンライナー。

その使命は過去から現在、そして未来へ続く時間の流れ、時の運行を守ることに

次の駅は過去か未来か……

深夜のビル街

1つの人影がビルからビルへ、次々と跳躍していく。

否、人影……即ち人間と言うと語弊がある。

そもそもビルからビルへ飛び移るなど普通の人間には不可能だ。

更にその人影の姿も明らかに人間離れした異形の姿をしている。

次々にビルからビルへ飛び移りながら、その異形……蜘蛛の姿をしたスパイダーイマジン（以下、スパイダー）は周りのビルより一

際高い高層ビルの屋上に降り立った。

イマジンとは、時間の流れから孤立した未来からやって来た未来人の精神体であり、

その目的は人間の記憶を辿って過去に飛び、歴史を改変して現在の時間を未来の自分達の時間に繋げることである。

スパイダーI

「ん？」

ふと、何かの気配を感じたスパイダーIが視線を上に向けると、上空に開いた光の穴から巨大な列車が出現した。

スパイダーI

「おわっ！？」

電車がスパイダーIの前を通過すると、目の前には髪の毛が逆立ち、赤い目をした少年が立っていた。

？

「へっ、見つけたぜ。イマジン野郎」

少年は不適な笑みを浮かべ、スパイダーIを指差す。

この少年の名は野上良太郎。

イマジンから時の運行を守る時の列車・デンライナーに乗る時の流

れの影響を受けない“特異点”の1人である。

良太郎は本来、20代の青年なのだが、以前に時の歪みの影響を受けて以来、子供の姿に戻ってしまったままだった。

スパイダーI

「あっ？なんだ、テメエは！？」

良太郎？

「はっ！別に答える義理はねえなあ！」

良太郎？は足を組んで言い放つ。

見るからに傲岸不遜に見えるが、この状態は良太郎本来の人格ではない。

良太郎は本来はおとなしく心優しい性格なのだが、イメージでありながら時の運行を守るために共に戦う4人のパートナーイメージが憑依すると、そのイメージの人格が主体になる。

現在は乱暴で言葉遣いは悪いが、根はイイ奴の赤鬼型イメージ・モタロスが憑依している状態だ。

良太郎

（モタロス、何やってんの。早く変身しなきゃ！）

M良太郎

「へっ、わかってるって！行くぜ、良太郎！」

M良太郎（モタロスが憑依した状態）は、ベルトを装着し、赤い

フォームスイッチを押し、中心にあるターミナルバックルにライダーパスをセタッチ（セット＆タッチ）する。

M良太郎

「変身！！」

ターミナルバックルは赤く輝き、音楽と共にM良太郎の姿はまず電王の基本形態である黒い姿・プラットフォームに変わる。

そして陣羽織を連想させる赤いアーマーが装着され、最後に桃のよな形の頭部パーツ・電仮面がレールに沿ってセットされ、その姿は電王のモモタロス専用形態、仮面ライダー電王・ソードフォームに完全に変わった。

電王SF

「俺、久々に参上！」

変身が完了し、電王SFは毎度おなじみのポーズを取り、自身の決め台詞を高々と叫ぶ。

スパイダーI

「けっ、馬鹿が！」

スパイダーI高く飛び上がり、電王SFに向かって拳を振り下ろす。

電王SF

「行くぜ行くぜ行くぜ！！」

電王SFは腰に付けた列車型の4つのパーツで構成された複数の形態を持つ武器・デンガッシャーを組み合わせ、剣型のソードモード



に組み立てる。

電王SF

「おらぁ！」

電王SFはデンガツシャーSMを勢いよく振り下ろし、飛んできたスパイダーIの体をすれ違いざまに斬り裂く。

スパイダーI

「ぐあつ!？」

スパイダーIは斬られたダメージで地上に落下した。

電王SF

「覚悟しろよ、俺は最初から最後までクライマックスだぜえ!!」

勢いづいた電王SFはスパイダーIを何度も切り裂く。

スパイダーI

「く……くそっ!調子に乗ってじゃねえ!」

スパイダーIはパンチを繰り出すが、電王SFは片手でそれを受け止める。

電王SF

「勘違いしてんじゃねえよ、調子に乗ってんのはてめえの方なんだよ!」

電王SFはスパイダーIを蹴り飛ばす。

スパイダーI  
「ぐっ!?!」

蹴り飛ばされたスパイダーIは地面に叩きつけられ、先ほどの斬撃のダメージも相まって既にフラフラな状態になりながらも、なんとか立ち上がる。

電王SF

「さあ、終わりにしようぜ!」

【Full Charge】

バックルの中央部にパスを翳し、電王SFはデンガッシャーSMを構える。

スパイダーI

「ちっ、ちくしょうっ!!!」

危険を察知し、スパイダーIは電王SFに背を向けて逃げ出す。

電王SF

「逃がすかよ!俺の必殺技!パート2!」

電王の叫びに呼応し、デンガッシャーSMの先端の刃・オーラソードが切り離された。

電王SF

「おりゃああああ!!」

遠隔操作されたオーラソードはスパイダーIに向かって真っ直ぐ振り下ろされる。

スパイダーI

「ぐあああああ!？」

電王SFの必殺技・俺の必殺技パート2（エクストリームスラッシュ）をくらい、スパイダーIは一刀両断され爆発した。

電王から離れたビルの屋上。

3つの影が電王を見ていた。

しかし、その場に居たのは、“決してこの場に存在しないはず”の者達だった。

？

「やっぱり負けたかあゝ。ああゝム力つくなあゝ。俺、そうゆう顔してるだろ？」

肩からストールを掛けた若い男は“満面の笑み”を浮かべながら右

隣にいる“純銀の金棒を持つ長い白髪の人”に尋ねた。

？

「ああ？なにニヤニヤしてやがんだ！潰すぞ！」

？

「よせ、ミミヒコ」

金棒を振り上げたミミヒコと呼ばれた男を、“黄金の錫杖”を持った男が制する。

ミミヒコ

「に、兄ちゃんが言うなら…」

ミミヒコは渋々と金棒を振り上げた手を下ろす。

彼らはかつて電王に敗れ、消滅したはずの者達だった。

未来からやって来た、かつてイマジンを率いた青年・カイ

過去の時代で鬼退治の歴史を改変しようとした兄・クチヒコと弟・ミミヒコのオニ一族の兄弟

？

「こちらに居られましたか」

突然聞こえた声に3人はゆっくりと振り返る。

そこには黒いロングコートを羽織り、眼鏡を掛けた長身で細身の男が立っていた。

男の纏う雰囲気は陰険そのもので、夜の月明かりが男の不気味さを際立たせていた。

クチヒコ

「おお、ビシヨップ殿。何故ここに？」

クチヒコはビシヨップと呼ぶ男に歩み寄る。

ミミヒコは兄の後ろに付いて行くが、カイはチラッと一目見ただけで、その視線は夜空に向けている。

この陰気な男の名はビシヨップ

かつてファンガイアと呼ばれる魔族の参謀格だった男だ。

彼もまた、死んだはずの存在なのだが……

ビシヨップ

「報告に参りました。アナタ方がお探しの“時の方舟”の所在が判明いたしましたで」

クチヒコ

「おお、遂に！！」

ミミヒコ

「へっ、やるじゃねえか！」

オ二兄弟2人が歓喜し、カイもまた不気味な笑みを浮かべ、ビシヨップを見る。

一方、ビシヨップは全く表情を変えず、淡々と報告を伝える。

ビシヨップ

「回収には“彼”が向かうそうですが……よろしいでしょうか？」

ビシヨップは感情の宿らない瞳で3人を見る。

カイ

「どうでもいいよ別に誰でもさ」

クチヒコ

「我らも遠慮しておこう」

ビシヨップ

「承知いたしました。では、失礼いたします」

ビシヨップは一礼すると、静かに立ち去っていった。

デンライナーの食堂車

イマジン退治とゆう一仕事を終えて帰還した良太郎とモモタロスを仲間達が出迎える。

？

「おかえり、2人ともご苦労様」

もう1人の特異点の少女・ハナ

？

「良太郎ちゃんもモモタロちゃんもおかえりなさい」

客室乗務員のナオミ

？

「良太郎とついでに先輩、お疲れ様」

青い亀のような姿の、女好きで口の上手い詐欺師イマジン・ウラタロス

？

「お疲れさん。ついでに、モモの字もな」

熊のような姿で寝てばかりいるが、いざというときは頼りになる優しい力持ちのイマジン・キンタロス

？

「おかえりー、良太郎 ついでにモモタロスも」

竜の姿のワガママで甘えん坊な子供のイマジン・リュウタロス

モモタロス

「こらあ！亀、熊、小僧！誰がついでだ！誰が！

ウラ・キン・リュウタロスの3人がいつも通り弄り、短気なモモタロスが怒鳴る

いつも通りの賑やかなデンライナーの日常の光景だ。

ウラタロス

「それにしてもさ、何だか最近イマジンが随分出て来るようになってきてるよね？」

モモタロスをあっさり受け流し、ウラタロスは疑問を口にする。

良太郎

「うん……」

ハナ

「そうね。前に倒したはずのイマジンも出てきてるし……」

良太郎とハナはウラタロスの疑問に頷いた。

ウラタロスの言葉通り、最近イマジンの出現数がかなり増加していた。

かつてイマジンの元締めだったカイが消えても、カイの配下ではなかった数多くのはぐれイマジンの出現は後を絶たなかったが、近頃はカイがいたところと変わらないぐらい頻繁にイマジンが出現するよ



うになっていた。

それも新たなタイプが出て来る訳ではなく、以前に電王が倒したタイプばかりが出現していた。

？

「何かが、起ころうとしているのかもしれませんがねえ」

食堂車の奥、今まで日課である“旗付きのチャーハンの旗を倒さずを食べる”ことに挑戦していた謎の紳士、デンライナーのオーナーが静かに口を開いた。

オーナーがナプキンを取り、静かに立ち上がると、その場にいた全員の視線がオーナーに集まる。

オーナー

「とくにかく、今は出現するイマジンへの対処に地道に専念するしかありませんねえ」

それだけを言い残し、オーナーは食堂車を出て行った。

ウラタロス

「まっ、確かにね」

キンタロス

「俺らが頑張るしかないっちゅうことやな」

モモタロス

「へっ、バカ熊。オメエに言われるまでもないんだよ」

リュウタロス

「イマジン倒せばいいんだよね 答えは聞いてない」

各々が自分なりの意見を言いながら座席に座る。

良太郎

「あれっ？着信？」

座席に座り、イマジン達のやり取りを見守っていた良太郎だったが、電王のツール兼携帯電話・ケータロスを見ると、着信が入っていることに気が付いた。

良太郎は一旦、食堂車から出る。

賑やかなこの場所では、とても電話の内容が聞き取れない。

良太郎

「あれっ？」

ケータロスを開き、着信主を確認する。

ケータロスの着信履歴には意外な名前が表示されていた

“ 津上翔一 ” と……



## 第9話 変わらぬ・変わる戦い（後書き）

引き続きオリジナルライダー・怪人募集中です。

アイデア全ての採用はできませんがご了承ください。

第10話 再演・リターン・（前書き）

今回、戦闘シーンが少ないです。申し訳ありません。



タツロツト

「なんだか寂しいですねえ」

とある街にひっそりと佇む洋館。

ここは演奏家の間では、密かに凄腕といわれるヴァイオリン職人の青年の自宅兼工房である。

洋館の2階の工房では、この館の主・紅渡が今日も亡き父、紅音也が残した名器・ブラッディーローズを超えるヴァイオリン制作に取りかかっていた。

### 【紅渡】

彼はかつて、仮面ライダーキバとして、この世に13種存在する魔族の内の1つ、ファンガイアと壮絶な闘いを繰り広げた戦士でもある。

そして渡自身も、人間である父・音也とファンガイアの母・真夜の間に生まれたハーフでもある。

元来気弱な渡は、戦いの中で傷つき、時には悩むこともあったが、周りの人々に支えられながら多くの激闘と悲しみ、更に“異世界での戦い”も乗り越え、今ではすっかり頼もしい青年に成長していた。

？

「どおーだあ、渡。今日の調子は？」

小さな掌サイズの金色のコウモリが渡の周りをクルクル周回しながら尋ねた。

彼こそ13魔族の1つ、キバット族の名門キバットバット家出身にして渡の相棒であり親友・キバットバット？世である。

渡

「キバット、今日はお客さんが来るって言ったでしょ？そろそろ来る時間だから隠れた方がいいよ」

キバット

「客？ああ、ヒビキのおっちゃんが言ってたタケシの人だっけか？めんどくせーなあ」

数日前、かつて別の世界で共に戦ったヒビキから渡は連絡をもらった。

何でも、ヒビキの友人で猛子の鬼の武器の開発者がヴァイオリンを新しい鬼の武器制作の参考にしたいと思っていたらしく、その時ちようど居合わせたヒビキが渡のことを話したら是非とも見学したいと言っただけらしい。



渡も特に断る理由も無いため、すぐにOKした。

その開発者が来るのが今日なのだ。

渡

「仕方ないだろ。ヒビキさんの頼みなんだし。悪いけど我慢してよ」

渡は作業を一旦止め、キバットに頼む。

キバット

「わぁーたつよ、俺様の芸術のようなボディに魅入られて惚れられても面倒だからな」

そう言つてキバットは、渋々自分の寢床であるヴァイオリン形のケースに戻つていった。

渡

「はぁ……」

キバットに呆れながらも、渡はまたヴァイオリンに視線を向け、作業を進める。

静香

「渡、お客さん連れてきたよ」

渡の幼なじみの少女、野村静香が入ってくる。

？

「へえ、ここがヴァイオリンの工房なんだあ」

静香の後から工房内を見渡しながら女性が入ってきた。

渡

「ようこそ、ヒビキさんから聞いてます。僕がこの工房の持ち主の紅渡です」

？

「へえ、思ってたよりずっと若い……。あつ、ごめんなさい！私、滝澤みどりと申します。本日はよろしくお願いします」

【滝澤みどり】

ヒビキの中学時代からの友人であり、猛子関東支部の開発実験試験試作室の室長を務め、ディスクアニマルや音撃武器の開発も手がける才女である。

渡

「こちらこそよろしく願います。ヴァイオリンの制作工程が見たいってお話でしたよね？」

みどり

「はい。私、楽器関係の仕事してて……、ヒビキ君の知り合いにヴァイオリン制作の隠れた名人がいるって聞いてもう是非ともこの目で見たくて！ご迷惑おかけしてごめんなさいね」

勿論、みどりの言っている理由は偽りである。

しかし、それも仕方ない。

現場を見られたならともかく、一般の民間人が魔化魍を退治する鬼や、NPO団体であるTAKESHIの実態が鬼の支援組織・猛子であることなど知るわけがないし、話せるわけもない。

渡は鬼のことも猛子のこともヒビキから聞いて知っているが、その事情を知らないみどりが自分の身分を偽るのも仕方ないだろう。

渡

「いえ、そんなことないですよ。どうぞこちらへ」

《数時間後》

みどりのヴァイオリン制作取材は順調に進み、最終工程の塗料塗りを残すのみとなった。

渡

「じゃあ、最後の工程の塗料塗りに入ります。ヴァイオリンが名器になるか駄作になるか、それがこの塗料塗りで決まります」

渡はそう言って戸棚の奥から怪しい色をした瓶を取り出した。

みどり

「うつ！？」

静香

「く、クツサ〜い！！」

渡が取り出した瓶は凄まじい激臭を放ち、みどりと静香の嗅覚を刺

激した。

みどり

「な、何なの？それ〜！」

鼻をつまみ、顔をしかめながらみどりは渡に尋ねた。

渡

「あ、はい。これは僕特製の塗料です。深い色艶を出すためにいろんな材料を丸1日煮込んで作ったんです」

激臭を全く気にせず、渡は得意げに説明した。

精神的には立派に成長した渡だが、ヴァイオリンに深い色を出す塗料作りのために、怪しげな材料を収集し煮込むとゆう悪癖は全く改善されていなかった。

しかも、本人は自分の作った塗料の激臭に対して自覚が全く無いからタチが悪い。

みどり

「い、いろんな材料？」

渡

「はい。まず、コウモリの…」

静香

「待って！い、言わなくていい」

特製塗料の説明をしようとした渡を、静香が急いで静止した。

みどり

「そ、そうね！言わなくても大丈夫！」

静香の静止に、みどりも瞬時に同意した。

実際、この怪しげで激臭を放つ異物を目の前にすれば、誰もが中身を知ることを拒否するだろう。

・ヴウウウウウン・

しかし、渡が塗料を塗ろうとした瞬間、突如ブラッディーローズが音色を奏でだす。

みどり

「えっ？なに！？」

誰も弾いていないのに勝手に鳴りだしたヴァイオリンにみどりは驚きを隠せない。

ブラッディーローズの音色を聞きとった瞬間、渡は作業の手を止め駆け出した。

静香

「えっ！？ちよつと渡！？」

みどり

「なっ、ナニナニ？どうしたの！？」

2人の静止の声も届かず、渡は庭に停めていた紅色のバイク・マシンキバーに跨り発進させた。

渡が向かった先では少女がファンガイアに襲われていた。

蛸の性質を持ち、ファンガイアの4つのクラスの内、アクアクラスに属するオクトパスファンガイア（以下、オクトパスF）はどこか足元が覚束ない虚ろな様子で少女に迫る。

その身体中には、細い鳶が巻きついていた。

一方、襲われている女性、持田ひとみは恐怖に襲われていた。

### 【持田ひとみ】

ヒビキを人生の師と慕う青年・安達明日夢の幼なじみの女性である。

ひとみ

「な…なんなの!？」

目の前に怪物が迫っている状況に、ひとみは混乱していた。

仕事から帰る途中、いきなり現れた怪物に襲われる状況など、ライダーや怪人を認知していない一般人のひとみには全く理解できるものではない。

オクトパスF

「あ……あ……アゝア」

目の前の異形の怪物への恐怖で、身体が動かないひとみにオクトパスFはゆっくりと迫る。

ーブウウウウウンー

しかし、オクトパスFの触手がひとみを襲おうとしたその時、バイクのエンジンが響く。

渡が乗ったマシンキバーが到着したのだ。

渡

「キバット！」

運転したまま渡が右手を空に翳すとキバットが舞い降りる。

キバット

「出られなくて窮屈な思いをした分、キバって行くぜー！、ガブツ  
！！！」

渡

「キバット！」

運転したまま渡が右手を空に翳すとキバットが舞い降りる。

キバット

「出られなくて窮屈な思いをした分、キバって行くぜー！、ガブツ  
！！」

陽気に喋りながら渡の手に収まり、キバットは渡の左手を噛む。

キバットにより、魔皇力と呼ばれるアクティブフォースが注入されたのだ。

それに呼応し、渡の頬にはステンドグラスの紋様が浮かび、腹部には紅いベルトが出現した。

渡

「変身！」

渡は叫びながらキバットをベルトに合体させる。（実際にはぶら下がっている形になるが）

キバットが装着されると、渡の姿はファンガイアの王の鎧の1つ、“黄金のキバ”と呼ばれる戦士・仮面ライダーキバ・キバフォームに変わる。



キバ

「たあっ！」

キバはマシンキバーから飛び降り、その勢いのままオクトパスFに飛びかかった。

キバ

「はあっ！」

キバは素早い動きで、連続パンチを叩き込む。

オクトパスF

「あ…あ……」

キバ

「たあっ！」

オクトパスFがよろけた隙を突き、キバは勢いを付けたキックでオクトパスFを吹き飛ばす。

キバ

「早く逃げて！」

キバは恐怖で固まってしまっているひとみに向かって叫んだ。

ひとみ

「は……はい……！」

茫然としていたひとみは、キバの言葉に従い駆け出す。

みどり

「ひとみちゃん！」

ひとみ

「みどりさん!!」

走るひとみの前に、飛び出して行った渡を探していたみどりが走ってくる。

みどり

「大丈夫!？」

ひとみ

「は…はい」

みどり

「そう、よかった!」

怯えた表情で震えているひとみを庇いながら物陰に隠れ、みどりは戦っているキバとファンガイアを見る。

みどり

（アレはいったい何?……ひとみちゃんを助けたみたいだから怪物じゃないかもしれないけど……、鬼とは全く違う。吸血“鬼”って感じはするけど……）」

怪訝に思いながらも、みどりはヴァイオリンの制作工程を記録する

ために持ってきていたデジカメを戦っている2体に向ける。

みどり

（もう片方のタコみたいなのは完全に怪物ね。でも魔化魍じゃない。夏のヤツにも見えないし……それに身体に巻きついてる“蔦”みたいなのは何だろう？）

みどりが思考を張り巡らせていた頃、戦っていたキバとキバットは、目の前のファンガイアに違和感を感じていた。

オクトパスF

「あ……キ……キバ、ミツケ……タ」

オクトパスFはフラフラしながら立ち上がる。

しかし、その言動・様子は虚ろ。身体に巻きついていて細い蔦のようなものも含めて異常なのだ。

基本的にファンガイアは人間と大差ない思考を持つ。

かつては人間を餌と見るファンガイアが殆どだったが、中には人間を愛し恋に落ちる者も居た。

そして今は、殆どのファンガイアが渡の兄であるキング・登大牙の指導の下、人間との共存の道を歩んでいる。

なのに目の前のファンガイアは行動も言動もどこか虚ろで、意志の

ようなものは全く感じない。

高位のファンガイアが死んだ同胞の欠片から蘇らせたイミテーションと呼ばれる者も言葉も意志も持たないが、目の前のファンガイアはまた違う。

意志こそ感じられないが、オクトパスFはイミテーションとは違い、虚ろでたまたましいとはいえ言葉は持っているのだ。

キバット

「おい、渡。なんかコイツ様子がおかしいぜ。早いとこ終わらせた方が良さそうだ！」

キバ

「わかった！」

参謀でもあるキバットの言葉に従い、キバは右腰から笛型ツール・フエッスルの内、赤いフエッスルを取り出した。

キバット

「キバって、行くぜ！！！」

キバットが勢い良くフエッスルを吹く。

フエッスルはその名前と形通り、キバットが笛として吹くことにより効力を発揮するのだ。

キバットがフエッスルを吹いた瞬間、昼間だった筈の周囲の景色が夜のように暗くなり、空には三日月が浮かんだ。

そしてキバの右足、力を抑えるための鎖状のカテナ（拘束具）が弾け飛び、紅い蝙蝠の翼のような意匠の真の姿・ヘルズゲートが露わになる。

キバ

「はあああああ…、はあっ！！」

キバは右足を上げた状態で空高くジャンプする。

三日月を背に空中で一回転し、キバは必殺の飛び蹴り・ダークネスムーンブレイクをオクトパスFに叩き込んだ。

オクトパスF

「…ガ…バ…万…歳…」

オクトパスFの足元の地面が、キバの紋章の形に沈みオクトパスFの身体はステンドグラスのように砕け散り、爆散した。

？

「渡さ〜ん！」

キバが変身を解き渡の姿に戻ると、キバの仲間の一体、黄金の小型龍・タツロットが近づいてくる。

渡

「タツロット」

キバット

「おっ？タっちゃん、どうしたんだ？」

渡とキバットは家で留守番していたはずのタツロットが現れたことに首を傾げる。

タツロット

「お客さんですよ、キャッスルドランに」

渡

「えっ？キャッスルドランに！？」

キバット

「マジかよ！？ってことは…」

【キャッスルドラン】

13 魔族・ドラン族の最強龍、グレートワイバーンをファンガイアが移動要塞として改造したキバの下僕の一体で、城のような姿をし

た巨大な竜のことだ。

普段は高層ビルに擬態しているため一般人はおろか、渡の仲間達ですら訪ねることなど出来ない。

キバットやアームズモンスター達以外で知る者は殆どいない。

異世界で共に戦った“彼ら”を除けば……

渡

「タツロット、お客さんってまさか……」

タツロット

「ハイ、皆さん勢揃いしてますよー!」

## 第10話 再演・リターン・（後書き）

怪人の書き方を統一したいと思います。

グロンギ・ミラーモンスター・魔化魍以外は、モチーフとなっているもののあとに、

ロード R

オルフェノク O

アンデッド A

ワーム W

イマジン I

ファンガイア F

ドーパント D

ヤミー Y

をつけたいと思います。

例外として、名前が長ければ全て単語で表記する場合があります。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6803u/>

---

仮面ライダースサノオ KAMEN RIDERS SAGA

2011年11月29日22時51分発行